

高槻市文化財調査概要

島上郡衙跡発掘調査概要・5

—高槻市郡家本町・郡家新町・清福寺町・川西町・今城町所在—



1981・3

高槻市教育委員会

はしがき

本市において、直営事業として実施してまいりました史跡・嶋上郡衙跡附寺跡の調査は、早、五年目を迎える、嶋上郡衙に関する数多くの成果を得ました。特に、式内社・阿久刀神社周辺の調査では、弥生時代から中世に至る長期間にわたって集落が営まれ、また、山陽道の南の調査では、弥生時代後期から古墳時代後期にかけての墓地群が検出されるなど各時代の集落構成が徐々に明らかとなってまいりました。これは少なからず『嶋上郡衙』の成立・崩壊過程を考える上で貴重な資料を提供してきたといえます。

このように、長年の調査によって蓄積された成果を正確に把握し、嶋上郡衙の様相を明確にするためには、周辺遺跡群との関連が新たな問題点としておこってきました。こうした立場に立って、嶋上郡衙跡と密接に関連する数多くの遺跡の調査をも合せおこない、郡衙中枢域の様相を解明する手掛りが今までになく多くの成果をあげることができました。

ここに、今年度実施した発掘調査の結果をまとめ、多くの方々のご教示をあおぐとともに、調査にご協力いただいた関係各位に心から感謝する次第であります。

高槻市教育委員会

社会教育課長 森 健一

例　　言

1. 本書は、高槻市教育委員会が、国庫補助事業（総額8,000,000円）として計画し、調査を実施した高槻市所在、史跡・山上郡衙跡附寺跡周辺部及び郡衙関連遺跡の発掘調査事業の概要報告書である。
2. 調査は、高槻市教育委員会・市立埋蔵文化財調査センター所長富成哲也指導のもと、技術吏員大船孝弘、橋本久和、森田克行が担当し、大阪府教育委員会の助力を得て、昭和55年5月12日着手し、昭和56年8月31日、事業を終了した。
3. 本書の作成にあたっては、写真撮影を鍾ヶ江一朗氏に、遺物整理を恵谷英俊、武村雅一、堤誠三、山本敏幸の各氏に援助を得た。記して感謝の意を表します。
4. 調査の実施にあたり、戸内勇、岩本勇、中川巖、宮林美佐子、小松義康、宮田和憲、宮林幸太郎、楠本好之、石川國義、古藤勘治、米山智恵野、山本春男、当麻円照、西田元孝、氏原保雄、並川吉裕、鶴川順康、湯浅不動産㈱、下浦治作、古井秀吉、(社)無文会、鶴三和土地、鶴堀家工務店、鶴大江住宅などの土地所有者の援助をうけた。また、本市文化財保護審議会委員原口正三氏には、調査全般について、御指導いただいた。ここに記して感謝の意を表します。

目 次

I	鳩上郡衙跡	1
II	水室塚古墳	23
III	宮田遺跡	24
IV	富田遺跡	26
V	大藏司遺跡	27
VI	塚脇古墳群	29
VII	天神山遺跡	30
VIII	古曾部南遺跡	30
IX	安満遺跡	32
X	まとめ	42

鳩上郡衙跡他関連遺跡調査一覧

番	地 区	調 査 地	面 積	申 請 者
1	14-J-N 地区	郡家本町 825-1	922m ²	(社)無文会
2	38-I 地区	清福寺町 915-6	151	中川 廉
3	73-N 地区	郡家新町 142-1	229	岩本 勇
4	75-O 地区	郡家新町 159	125	楠本好之
5	22-A 地区	郡家本町 524-6	222	山本春男
6	N5-M 地区	郡家本町 889	419	並川吉裕
7	73-J-N 地区	郡家新町 148-5	702	下浦治作
8	6-L 地区	清福寺町 889-2	446	吉井秀吉
9	6-1-J-M-N 地区	清福寺町 886-2	870	聯三和土地
10	7-C-G 地区	清福寺町 789-1, 790-2	205	聯堀家工務店
11	6-M-N 地区	清福寺町 886-1	764	堀家商事
12	6-J-K-N-O 地区	清福寺町 887	641	聯堀家工務店
13	水室塚古墳	水室町 2 丁目 571-8	120	小松義康
14	"	水室町 2 丁目 91-1・2・3	243	富田和寛他
15	宮田遺跡	宮田町 3 丁目 87-1	381	石川国義
16	"	宮田町 3 丁目 1-8	80	米山智恵野
17	富田遺跡	富田町 4 丁目 2527	37	藪内勇
18	"	富田町 6 丁目 2767	409	西田元孝
19	大藏司遺跡	大藏司 2 丁目 202	841	古藤勤治
20	"	宮ノ川原 4 丁目 564-6	876	氏原保雄
21	塚脇古墳群	塚脇 1 丁目 2309	1,333	当麻円照
22	天神山遺跡	天神町 1 丁目 10-86	793	聯一輪 エンターブライズ
23	古曾部南遺跡	古曾部 2 丁目 170 他 7 筆	4,496	湯浅不動産営業
24	安満遺跡	高垣町 15 他 5 筆	3,267	聯大江住宅

鳴上郡衙跡発掘調査概要

I. 鳴上郡衙跡

1. 14-J・N 地区の調査

高槻市郡家本町 325-1 番地にあたり、小字名はフクヅカと称する。史跡・鳴上郡衙跡の西北約 120m に位置し、府道郡家一茨木線の北側に面している。現状は水田であるが、保育所建設の目的で、土木工事等に伴う発掘届が提出されたため、文化庁・府教委等関係者とも協議のうえ、発掘調査を実施した。

調査予定面積は約 900 m²あり、耕土の関係から、東西に 2 分して、調査をおこなった。

(A) 遺構(図版第 4~7・83・84)

調査は、まず調査区域の東半分を重機で包含層まで掘りさげ、遺構面を追求した。その結果、黄褐色土層上地山面で弥生時代後期、古墳時代後期、歴史時代(7世紀中頃)の遺構をそれぞれ検出した。西半分の調査では、地山面が灰褐色土層に変り、遺構も少なく、古墳時代の土壠や中世のピットが若干認められただけである。主な層序は、耕土(0.2m)、床土(0.05~0.1m)、茶灰色土層[歴史時代包含層](0.3m)、茶褐色土層[弥生~古墳時代色含層](0.1~0.2m)、黄褐色土層ないし灰褐色土層(地山)となる。弥生時代遺構面は、標高約 19m である。

(1) 弥生時代の遺構(図版第 4・84)

この時期の遺構としては、井戸 2 基と溝がある。井戸 1 は調査区の中央部で検出された。円形素掘りで、上部径 1.5m、底径 0.75m、深さ 1.8m を測る。埋土は 4 層に分れ、最下層である、I 層は黄褐色粘質土で、遺物はあまり含まれず、II 層である暗灰色粘質土からこの井戸の遺物の大部分が出土している。III 層の茶褐色土は厚さ 5cm 程度の間層で、IV 層は黒褐色土である。時期は、出土土器から畿内第Ⅳ様式期である。井戸 2 は、調査区東辺で検出され、井戸 1 と同じく、円形素掘りである。井戸は、その大部分が古墳時代の土壠と重複しているため、遺存状況は良くない。規模は、上部径 1.5m、底径 1.0m、現存深 0.5m を測る。埋土は 2 層に分れ、下層は淡緑灰色粘質土、上層は茶褐色土である。遺物は、畿内第Ⅳ様式期の土器のみである。溝は、調査区の南東部を斜めに直進している。方向性は N-40°-E である。溝 1 は埋土観察から、2 時期に分けて、掘さくされている。最初は、断面 U 形の溝で、幅は上辺で 0.6m、底部で 0.45m、深さ 0.55m を測る。埋土は、暗灰色粘質土と黄褐色粘質土と黄褐色粘質土の混土層で、明らかに人为的に埋められたものと考えられるものである。その後、この溝を踏襲しながら、若干左右にふれるものの、新たな溝が掘さくされている。この溝は、断面 U 字形で、幅は上辺で 0.7m、底部で 0.2m、深さ 0.4m を測る。埋土は淡緑灰色粘質土層である。この溝の出土遺物(土器)は、ほとんどこの埋土から検出されており、畿内第Ⅳ様式期最終末に比定されるものである。後者の溝の掘さくについては、地山が固い礫層であることによる前者の溝の再利用とも考えられるが、前者の溝がなぜ人为的に埋められたかということについては、明らかでない。

(2) 古墳時代の遺構(図版第5・84)

この時期の遺構としては、土壙20基がある。土壙1は長さ1.8m、幅1.4m、深さ0.4mを測り、卵形を呈する。埋土は、2層あり、下層が暗茶灰色土層、上層が暗褐色土層である。遺物は主に上層から出土している。土壙2は、径3.2m、深さ0.5mを測り、ほぼ円形を呈する。埋土は4層に分れる。土壙底部には、深さ数cmの溝状遺構や深さ5~10cm内外のピット状の凹みがみられ、凹凸状になっている。遺物としては、弥生時代後期~古墳時代の土器類をはじめ、埴輪片や土鍬などを探出している。土壙3は、土壙2を切った状態で検出された。1辺2.7m四方の隅丸方形を呈し、深さ0.65mを測る。埋土は6層に分れ、そのうち2層目の黒褐色土層は、土壙2の最上層と同一層になつておらず、土壙3が埋没する時点では、土壙2がまだ完全に埋まつておらず時期差は短いと考えられる。遺物は須恵器、土師器をはじめ、若干の弥生式土器と土鍬・鉄鎌がある。土壙4は、長さ約2.8m、幅1.8m、深さ0.3mを測り、長円形を呈している。底部に、径0.8mのピット状の凹みが數ヶ所みられる。土壙の南東部は、建物2の柱穴によって切られている。埋土は暗灰色粘質土の單一層で、中から弥生式土器の細片が若干出土している。土壙5は、土壙4と切り合っているが、前後関係は明らかでない。長さ3.6m、幅2.3m、深さ0.15mを測り、大きい割に浅い。埋土は3層に分れ、中から弥生式土器片と須恵器が出土している。土壙6は、長さ約2m、幅約1m、深さ0.35mを測り長円形を呈している。埋土は2層あり、上層の黒灰色粘質土層から、弥生式土器の壺片が1片出土している。土壙7は、土壙6に接して掘られているが、前後関係は不明。長さ約1.5m、幅0.8m、深さ0.35mを測る。埋土は3層に分れるが、遺物は検出されなかった。土壙8は、長さ約1.2m、幅1.0m、深さ0.2mを測る。土壙の南端は後世のピットで切られている。また土壙の南隅から径0.2mの扁平な石が、底から若干浮いているものの、ほぼ水平の状態で出土した。用途は不明である。埋土は黒褐色土で、土師器片が出土している。土壙9は、土師器片が若干出土している。長さ1.8m、深さ0.5mを測る。土壙の西端は、一段浅くなっている。埋土は黒褐色土で、出土遺物はない。土壙10は、長さ1.4m、幅0.8m、深さ0.8mを測る。底部は階段状になっている。埋土は、暗褐色粘土で、出土遺物はない。土壙11は長さ約1.2m、幅0.7m、深さ0.7mを測る。土壙の両端はそれぞれピットと重複している。埋土は暗灰色粘土で遺物はない。土壙12は、長さ1.6m、幅1m、深さ0.2mを測る不定形土壙である。埋土は黒褐色土で、出土遺物はない。土壙13は、長さ1.1m、幅0.8m、深さ0.15mを測り、中央底部が若干凹んでいる。埋土は2層みとめられるものの、出土遺物はない。土壙14は、調査区南辺西寄りで検出したもので、土壙の一部は調査区域外である。長さ2.8m、幅約1.5m、深さ0.3mを測り、土壙の東半分はピット状になっている。埋土は黒褐色土と明茶褐色土で、出土遺物はない。土壙15は、長さ1.8m、幅1m、深さ0.1mを測り、片すぼまりの長方形を呈する。埋土は黒褐色土で、中から土師器片、須恵器片、埴輪片が出土している。土壙16は、調査区東辺中央部で検出したもので、一部は調査区域外にある。幅0.7m、深さ0.5mを測る。埋土は明灰色粘質土で、出土遺物はない。土壙17は、長さ2.9m、幅2.2m、深さ0.5mを測り、底部南側が少し深くなっている。遺物としては、須恵器片、土師器片、弥生式土器片が若干みられた。埋土の状態はやや特異で、南半分が黒灰色粘質土の單一層で、北半分が茶褐色ないし暗灰色系の土層の堆積層になっている。なおかつ、南側と北側の埋土の境は、

明瞭な切り合ひ関係がみられない。(図版第5・84)。このような埋土の状況を示すものに、土壙18と土壙19がある。土壙19は、井戸2の北側を切り込んだかたちで検出された。長さ約2m、幅約1.4m、深さ0.5mを測る。埋土は土壙17の状況と逆で、南北が入れかわり、北側が黒灰色土の單一層、南側が幾層かの堆積層になっている。出土遺物はない。土壙19は、長さ2.3m、幅1.7m、深さ0.7mを測る。埋土は北側が黄灰褐色粘質土層、南側が黒灰色粘質土層で、その中心にある境界は、底面に対してほぼ鉛直線になっている。出土遺物はない。これら3基の土壙はいずれも比較的しっかりした掘り方を有し、深く掘られていることなど共通要素が多い。遺構の性格については判然としないが、これまでの島上部跡跡の調査で、しばしば検出されている三ヶ月形の土壙と関連するものかもしれない。今後の類例の増加をまって検討したい。土壙20は、土壙19の北側で検出したもので、大半は土壙19によって切られている。長さ2.6m、深さ0.5mを測り、幅は不明である。埋土は2層みとめられたが、出土遺物はない。

以上の七壙の時期については、土壙2・3からまとめて出土した、6世紀後半と考えられる須恵器・土師器や各土壙の埋土の状況から、おおむねこの時期を考えている。ただし、土壙2・3は規模・出土遺物(铁鎌・土鍤など)からみて、他の七壙とは性格の異なるものと考えられる。また、前記3例(七壙17・18・19)については、今後の課題である。

(3) 歴史時代の遺構(図版第6)

遺構としては、建物2棟と倉1棟がある。建物1は、調査区中央やや北寄りで検出したもので、2間(柱間1.3m)×3間(柱間1.4m)の西向きの掘立柱建物である。柱穴はその一部を欠くものの径0.5m、深さ0.4m前後で、不整円形のしっかりしたピットで、埋土はおむね黒灰色粘質土である。建物の長軸方向はN-10°-Wで、西側に庇をもつ構造のものと思われる。建物2は、調査区北辺東寄りで検出したもので、建物の北側については、調査区外にある。規模は2間(柱間2.2m)×3間以上(柱間1.9m、一部2.7m)で、長軸方向はN-19.5°-Wである。西側の柱穴は、1辺0.7m、深さ0.3m前後の方形ピットであるが、南側や東側の一部においては不整形なものが多い。また、南側の柱列については、南北方向の柱間の長さからみて、この建物の一部として考えるとやや躊躇する。柱穴の埋土は暗茶褐色土で、建物1のそれとはやや異なる。倉は、調査区中央南寄りで検出したもので、規模は2間(柱間1.6m)×2間(柱間1.6m)である。柱穴は1辺0.5m、深さ0.4m前後の方形に近いピットで、埋土は黒灰色粘質土で、建物1の柱穴と同様である。主軸方向はN-20°-Wである。これら3棟の建物の時期については、各ピットから出土した土器片の中に7世紀代の土師器杯を最新の遺物として包含するところから、この時期のものとみている。このことは、これまでの郡跡跡で調査した掘立柱建物の主軸の方向性と年代観からみて大きな矛盾はない。なお、建物1の西側に径0.2m内外の小さなピット群を検出している。これらのピット内からは若干の瓦器片が出土しており、調査区全域で検出されている小さなピットについても、中世まで降るものがあると思われる。

なお時期不詳の遺構としては、調査区東辺中央部で検出した溝や落ち込みがある。これらの遺構は、包含層である茶褐色土層上面から掘り込まれており、新しいものであろう。

(B) 遺物(図版第16~28)

(1) 弥生時代の遺物 (図版第16・19~21)

この時期の遺物としては、井戸1・2、溝1、包含層から出土している。井戸1からは、壺・甕・鉢・高杯が検出されているが全形を知るものはない。壺1は、球形の体部に外反する口縁部を有する広口壺である。体部は粗雑なヘラミガキを施し、口頭部はヨコナデ仕上げをしている。色調は淡茶褐色。壺2も広口壺で、口縁端に1条の沈線を施している。色調は灰褐色。壺3は、立ち上った頸部と屈曲しきく外反する口縁部を有するもので、口縁端部は上下にわずかに拡張され、面をもつ。遺存状態はよくない。色調は淡茶褐色。その他、口縁端に凹線や円形付文、刻目文などを施した壺類や長頸壺などがある。鉢では直口縁のものがある。高杯は、外反する口縁部を有するものが出土している。甕片は少なからず出土しており、底部外面に木葉痕を残すものなどがみられる。なお、器台片も1点みとめられた。井戸2からは、鉢・有孔鉢をはじめとして、壺・甕・高杯がある。鉢4は、突出した底部と、上方へ彎曲ぎみに大きく開く体部に外反する口縁部を有する。口縁端部は上方へわずかにつまみあげ、面をもつ。外面ともナデ調整を施している。有孔鉢5は、直口で端部はヨコナデ調整。外面にタタキ目を残し、内面は、ナデ調整している。底部外面は凹み、穿孔は内側からおこなっている。色調はいずれも淡茶褐色である。受口状口縁を有する甕は、肩部に刷毛原体による直線文を、口縁部と直線文下に同じく列点文を施している。外面ともナデ調整され、タタキ目は残っていない。色調は淡褐色。溝1からは、壺・甕をはじめ、高杯・手形培土器・小型壠台・有孔鉢などが出土している。壺は波状文や円形付文で加飾されたものが多く、二重口縁のものも少なくない。有孔鉢のなかには、底径5.9cmを測るものがあり、この種のものとしては大きい。このほかにも、同一個体と思われる丹塗りの壺片が3点出土している。以上、井戸1・2、溝1から検出された土器類については、おむね、後期後半のものであり、溝1出土のものについては、後期末と考えられる。つぎに、包含層出土の土器についてみると、中期の壺と考えられるもの2点（内1点は河内産）を除いて、あとはすべて後期のものである。そのなかで、大型壺の底部外面にある模痕が目につく。模痕は3ヶ所あり、それぞれ8×3.5mm、6.5×3mm、7×3.5mmである（図版第21a）。

(2) 古墳時代の遺物 (図版第16~19・21~28)

この時期の遺物としては、いくつかの七墳から検出された七器類が主である。以下、順を追って略記する。土墳1からは、土師器の羽釜・甕や須恵器の小形壺などが検出されているが、いずれも破片で、土墳の性格を示すものはない。七墳2は遺構の項で記したように、土墳3と切り合い関係があり、なかなかそれらの時期差の少ないことが判明している。土墳2からは、須恵器（杯身・杯蓋・高杯・台付長頭壺の蓋）・土鍬・埴輪などが出土している。須恵器の杯身は底部の $\frac{2}{3}$ 近くまで、ヘラ削り痕があり、受部の立ち上りも高くはないものの、しっかりしており、年代観としては、6世紀後半（前葉）と考えられる。埴輪は盾形埴輪の鱗の破片で、表面にヘラ描きで文様を刻んでいる。意匠は不明。また丹塗りの痕跡も顯著である。埴輪の色調は淡褐色。土墳3からは、須恵器（杯身・杯蓋・高杯・台付長頭壺・壺・甕・鉢）、土師器（鉢・高杯・鍋）などが出土している。須恵器の杯身は、その受部の立ち上りの内傾度が強くなり、底部に平坦面をもつものが含まれるなど、新し

い要素がみられる。6世紀後半(中葉)頃であろう。土師器の鉢は精良な胎土の鉢6と砂粒の目立つ鉢7・8がある。そして、鍋・高杯などの胎土は、後者の鉢のそれに近い。つぎに土壙2と土壙3の埋土の上層にある黒褐色土層から検出された遺物をみてみると。土器類では須恵器(杯身・杯蓋・台付長頸壺の蓋・盤)があり、その他埴輪(円筒)・土鏡・鐵鏡などがある。須恵器の杯身は土壙3のものと比べて大きな変化はないが、底部の平坦なものが多く出土している。時期的には6世紀後半(中葉)であろう。土鏡は完形品が8点、破損品が2点ある。そのうち3は土壙付近の包含層から出土しており、また土鏡の何点かについては、土壙3から出土した可能性がある。土鏡の完形品についてみると、長さ7.1cm~8.4cm、幅1.8cm~2.4cm、重さ27g~57gを測る。形態的には、土壙2で検出したものとは異なり、円柱状の土塊の両端近くに直交するよう穿孔し、そして、片方の端部に1条の溝を掘りくぼめている。なお9は、11と同形態である。鉄鏡は、長さ7cm、身幅2.6cm、中子幅1.2cm、重さ19gを測る。片方のかえりは欠失している。土壙5からは、須恵器の無蓋高杯の杯部が1点出土しており、外面にヘラ記号がみられた。土壙8・15・17の埋土から若干の須恵器片や土師器片が出土しているが、きめてにはならない。その他の遺物としては、包含層から、須恵器(壺・甕・器台・杯)をはじめとして、土師器(片口鉢・鉢・盤)や埴輪片(円筒)などが出土している。埴輪は淡黄土色を呈し、タガの断面は低く、中央は凹面状にくぼんでいる。

(3) 歴史時代の遺物 (図版第19)

この時期の遺物は、建物の柱穴やその他のピット及び包含層から若干出土している。杯2は倉1の柱穴から、杯3と蓋4はピットから、杯5は包含層から、それぞれ検出され、いずれも7世紀前半~中頃にかけてのものである。なお、この他10数カ所のピットからも土師器の杯片が出土している。瓦器碗6は、建物1の西側の小さなピットから検出されたもので、12世紀末に比定される。色調は灰褐色を呈し、瓦器製作時における炭素吸着工程が省略されたものと考えられる。以上、遺物について概観したが、包含層出土の土器をまとめると、弥生土器(後期)が最も多く、つづいて、古墳時代の土師器・須恵器があり、奈良時代以降の土器はわずかである。ただし、各ピットの土器については、6世紀から7世紀にかけての土師器が目立っている。(森田)

2. 38-I 地区の調査 (図版第7・85)

高根市清福寺町915番地6にあたり、小字名は川西北浦と称する。史跡・崎上郡衙跡の東に位置する。現状は宅地である。このたび、個人住宅を改築する目的で、土木工事等に伴う発掘届が提出されたため、文化庁・府教委等関係者とも協議のうえ、事前に発掘調査を実施した。

調査は、当該地の中央部に4m×5.5mのトレントを設けておこなった。層序は盛土(0.25m)、灰色砂礫層(0.05m)、耕土(0.15m)、床土(0.1m)、黄灰色砂礫土層(0.1m)、暗茶褐色土層〔遺物包含層〕(0.25m)となる。地山は黄褐色砂礫土層で地山面の標高は14.8mである。

検出した造構は、土壙3基と若干のピットである。土壙1は長さ約1.7m、幅1.4m、深さ0.2mを測る。南部は落ち込み状の造構とつらなり、判然としない。埋土は、暗灰色礫土層で、遺物は弥生式土器の細片が出土している。土壙2は長さ1.0m、幅0.85m、深さ0.15mを測り、隅丸長方形を呈する。土壙の西寄りに径0.2mのピットを検出しているが、土壙に伴うものは判然としな

い。埋土は茶褐色土である。土壙3は調査区の西北隅で検出したもので、幅1.8m、深さ0.3mを割り、長さは不明。壙底の形状から察するに溝状遺構になる可能性もある。埋土は茶褐色土と暗灰色土の2層みとめられた。ピット類も若干検出しているが、まとまって建物遺構などを構成するものもない。遺構の時期については、伴出遺物がほとんどないため明確にはしがたいが、本調査区周辺のこれまでの調査によって、弥生時代中期の方形周溝墓や後期の住居址を検出していることから、このころの時期の遺構と考えられよう。

遺物については、包含層から若干の中・後期の土器片及び石窓片が出土している。(森田)

3. 73-N地区の調査

高槻市郡家新町142-1にあたり、小字名は藤ヶ本と称する。現状は宅地である。史跡・島上郡衙跡の南西部に位置し、府立三島高校の東方約20mのところである。このたび、個人住宅に新築する目的で、土木工事等に伴う発掘届が提出されたため、文化庁・府教委等関係者とも協議のうえ、発掘調査を実施した。

調査は中央部に4m角のトレンチを設け、残土・盛土の関係から重機を使用しておこなった。層序は盛土(0.8m)、耕土(0.15m)、床土(0.1m)、青灰褐色土層(0.15m)〔整地層〕、黄褐色粘土層〔地山〕である。

検出した遺構は、径20~25cm、深さ5~10cmの小さな柱穴が3個ある。柱穴の埋土は淡茶褐色土層であり、遺物は認められなかった。また整地層からは土師器細片2点が出土しているが、器種および時期については不明である。(大船)

4. 75-O地区の調査

高槻市郡家新町159番地にあたり、小字名は東藤ヶ本と称する。史跡・島上郡衙跡の南側に位置し、西国街道と辻子下ノロ線の交差点から南方約170mのところである。すぐ東側は昭和54年7月に調査がおこなわれ、多数の古墳跡が検出されている。現状は宅地である。このたび個人住宅を改築する目的で、土木工事等に伴う発掘届が提出されたため、文化庁・府教委等関係者とも協議のうえ、発掘調査を実施した。

調査はまず調査区中央部に4m角のトレンチを設け、盛土に碎石が使用されていることもあるって、まず重機で耕土まで掘り下げ、その後人力で遺構を検出した。層序は盛土(1.4m)、耕土(0.15m)、青灰色粘土層(0.15m)〔床土〕、黄褐色土層〔地山〕である。

検出した遺構は、調査区が狭いこととあって東西中央部に幅2m、深さ0.2mの溝のみである。溝中の埋土は暗茶褐色土を呈し、遺物はまったく出土しなかった。

しかし、これら検出した溝は、東側の発掘調査成果などと考え合せて見ると、墳丘が削平された方墳の濠と考えられる。(大船)

5. 22-A地区の調査

高槻市郡家本町524番地6にあたり、小字名は黒里と称する。史跡・島上郡衙跡の西北約400m

に位置している。現状は宅地であるが、このたび個人住宅改築の目的で、土木工事等に伴う発掘届が提出されたため、文化庁・府教委等関係者とも協議のうえ、発掘調査を実施した。

調査は中央やや西寄りに $2m \times 3m$ のトレンチを設けておこなった。盛土が厚いため小形ユンボを使用した。層序は盛土 ($1.8m$)、耕土 ($0.15m$)、床土 ($0.1m$)、灰褐色粘土層〔地山〕 ($0.3m$)、褐色礫層〔地山〕となり、遺物包含層や遺構は検出されなかった。遺物としては、床土から水田造成時の混入と考えられる須恵器片が出土している。以前、本調査区の北側で旧石器資料が得られているため、灰褐色粘土層を掘り下げ追跡したが、検出できなかった。(森田)

6. N5-M 地区の調査

高槻市郡家本町 889 番地にあたり、小字名は東上野と称する。史跡・島上郡衙跡の北側に位置し、阿久刀神社の西方約 $150m$ のところである。北側は芥川の土堤に接している。現状は宅地であるが、このたび宅地造成の目的で、土木工事等に伴う発掘届が提出されたため、文化庁・府教委等関係者とも協議のうえ、発掘調査を実施した。

調査は庭木・建物基礎等の関係から、調査地の南側に東西 $7m$ 、南北 $1.5m$ のトレンチを設けておこなった。層序は盛土 ($0.3m$)、耕土 ($0.2m$)、床土 ($0.1m$)、茶褐色土層 ($0.4m$)〔遺物包含層〕となり、地山は暗黄褐色土層になる。地表面の標高は $23.6m$ を測り、ほぼ水平である。

検出した遺構は、調査範囲が限られたため、3 個の柱穴と 1ヶ所の落ち込みを認める。柱穴の規模は、いずれも径約 $0.2 \sim 0.4m$ 、深さ約 $0.2m$ を測る小さなものである。落ち込みは細長く不定形なもので、大部分が北側の調査地区外にあるため、全体については不明である。深さは約 $0.2m$ を測る。遺構内の埋土は包含層と同じ茶褐色土層である。

出土した遺物は、土器片と石器片が少量ある。柱穴・落ち込みなどの遺構から出土したものは、绳文式土器・弥生式土器片が若干とサスカイト剝片が 11 点ある。包含層から出土したものは、繩文式土器・弥生式土器・土師器・須恵器片が若干ある。繩文式土器はいずれも細片で風化が著しいが、腹部に貝殻条痕を残すものがある。胎土には砂粒を多量に含み、色調は赤褐色～暗褐色を呈する。弥生式土器も細片ではあるが、後期の叩き目を残す壺片を認める他、壺・蓋の細片がある。土師器は全体的に土器片が大きく、高杯の面部・壺腹部等がある。須恵器は 6 世器後半に属する蓋杯・高杯・壺の小片が 1 点ずつある。(大船)

7. 73-J・N 地区の調査

高槻市郡家新町 148-5 番地にあたり、小字名は藤ヶ本と称する。現状は水田である。史跡・島上郡衙跡の南西部に位置し、府立三島高校の東方約 $50m$ のところである。このたび宅地造成の目的で、土木工事等に伴う発掘届が提出されたため、文化庁・府教委等関係者とも協議のうえ、発掘調査を実施した。

調査は、まず遺構を確認するために東西 $2m$ 、南北 $40m$ のトレンチを中央部に設け、重機を使って耕土を耕土し、その他を人力でおこなった。耕土下はすぐに黄褐色砂質粘土層〔地山〕になり、

床土は認められなかった。地山面には瓦用の粘土採掘跡が、数ヶ所認められたが、遺構・遺物等はまったく検出することができなかった。地山面の高さは標高 16.7m を測る。(大船)

8. 6-L 地区の調査

高槻市清福寺町 889-2 番地にあたり、小字名は大畠と称する。史跡・鷺上郡衙跡の北約 300m に位置し、阿久刀神社のすぐ南側にあたる。現状は宅地であるが、個人住宅改築の目的で、土木工事等に伴う発掘届が提出されたため、文化庁・府教委等関係者とも協議のうえ、発掘調査を実施した。

調査は、当該地を南北に 2 分して実施した。主な層序は、盛土(0.2m)、灰褐色粘質土層(0.2m)、灰色粗砂層(0.15m)、褐色土層(0.5m)、暗茶褐色土層〔遺物包含層〕(0.4~0.5m)、黄褐色土層(地山)となる。遺構面の標高は約 16.8m である。

(A) 遺構(図版第 8・86)

検出した遺構としては、弥生時代中期の土壙、後期の住居址、奈良時代ないし平安時代と考えられる掘立柱建物跡などがある。

土壙 1 は調査区の北東部で検出した。幅 0.45m、深さ 0.2m を測る。主軸は、東西方向にあり、平面形はやや溝状を呈し、他端は調査区域外にある。土壙内からは、弥生時代中期(畿内第Ⅴ様式期)の把手付壺・広口壺などが出土している。土壙 2 は、調査区西南部で検出した。長さ 1.6m、幅 0.8m、深さ 0.4m を測る。住居址 1 との切り合い関係は判然としない。遺物としては、後期の壺片がある。土壙 3・4 は、調査区南東部で検出した。それぞれ長さ 0.8m、幅 0.5m、深さ 0.15m。長さ 0.8m、幅 0.5m、深さ 0.4m を測る。土壙 3 から土師器、壺片が検出されている。住居址 1 は、四柱穴構造をもつ方形プランの堅穴式住居である。東西 7.1m、南北 8.2m を測り、堅穴式住居としては大規模の部類に属する。中央には、心柱が立つと思われる径 0.7m、深さ 0.3m のピットを検出している。炉跡は、中央ピットの南側にあたり、径 0.5~0.6m、深さ 0.1m を測る。このピットの東壁面は厚さ 5cm にわたって焼土化している。4 本柱の柱穴は、いずれも深さ 0.6~0.7m を測り、しっかりした上部構造が考えられる。埋土は、暗褐色土と暗褐色粘質土で、下層の粘質土から畿内第Ⅶ様式の土器片が若干出土している。側溝は幅 0.15m、深さ 0.1m~0.2m(床面から)を測り、断面矩形である。堀土観察によると、側溝内に立てかけた板壁材が、約 10° の角度で内側に傾いた状況に認められた。さらに、側溝の外辺沿いに、0.3~1.0m の間隔で、径 0.1~0.2m 前後のピットが多数検出され、中には先細りのピットも混っている。おそらく板壁を上辺で支える横木を固定するための杭ないし柱材を打ち込んだ跡と考えられる。これまでの調査によっても、側溝内やその外辺部にピットを検出した例は多いが、これほど顯著に遺存した例は少ない。なお、床面北東部の柱穴から、鎌と思われる鉄器を 1 点検出しており、注意をひく。住居址 2 は調査区の東辺で、住居址 3 は、北辺でそれぞれ一部を検出したが、規模や時期については不詳。掘立柱建物跡は、調査区の北寄りで検出している。1 辺 0.6m、深さ 0.25m の方形ピットが 2 個東西に並んでいる。方位は N-14°-E で、柱間は 2.5m である。本調査区周辺のこれまでの調査では、奈良~平安時代にかけての掘立柱建物が多く検出されており、それらと関連させて考えるべきもので、

将来に期したい。ただ、西側の柱頭は皿状の中凸になっており、興味をひく。遺物としては、須恵器の壺片や土師器の皿片が出土している。その他の遺構としては、若干の落ち込みピットがあるが、遺物も微量であり、性格もいまひとつ判然としない。

(B) 遺物 (図版第24・25)

遺物は主に土壙1と住居址1から検出している。土壙1からはほぼ完形に復元できた把手付壺1と広口壺2が出土している。壺1は、あまり腹部のはらない長胴形の体部に、垂直に立ち上る口縁部を有するもので、肩部に把手が付く。体部はタタキ成形後、下半に下から上へヘラ磨きを施し、上半は刷毛調整後、ナデ調整している。内面は刷毛調整後、ナデしている。文様としては、口縁部全面に7本の凹線をめぐらし、体部上半に刷毛原体による列点文を3段に施している。胎土は砂粒を多く含み、色調は淡褐色である。広口壺2は、算盤玉状の体部に突帯状の口縁部がとりついたもので、頸部に2孔一対の小穴があけられている。外側の調整は不明。内面はナデしている。なま、頸部に穿孔しかけて、途中でやめた痕がみられた。胎土は精良で、色調は灰褐色である。住居址1出土の土器類は破片ばかりで、全体を知りうるものがない。器種としては、壺・小型器台・高杯などがある。また、砲と考えられる鉄器が1点、柱穴から出土している。出土位置は、床面下約10cmのところであった。長さ10.3cm、身幅1.8cmを測る。さらに埋土上層の暗褐色土から、磁石を検出している。長さ32.5cm、最大幅11.8cm、厚さ10.5cm、重さ約5.9kgを測る大きいものである。石材は火成岩の一種で、輝緑岩と思われる。研ぎ面は若干凸凹しており、原礫面の起伏が感じられる。これは本来砾石の原料に不向きな、硬質の石材を使用したためであろう。つぎに包含層から出土した遺物についてみる。土師器の壺3は扁球形の体部に大きく立ち上る口縁部を有するもので、内外面とも風化が激しく、調整は不明。色調は灰褐色。高杯4は口縁部が斜め上方へ大きく開くもので、脚部は中空である。いずれも布留式に併行するものである。その他、弥生式土器(後期)や古式土師器、須恵器(奈良時代)・瓦器碗などの破片が出土している。土器以外では、石劍は現存長3.8cm、同幅2.2cmを測る。鉄劍形石劍の先端に近い部分である。石材は粘板岩。金環は幅1.9cm×1.75cmで太さは0.84cmを測る。遺存状態は良く、金箔の欠損はまったくない。(森田)

9. 6-I・J・M・N地区の調査

高槻市清福寺町886-2番地にあたり、小字名は大畑と称する。現状は水田であり、式内社・阿久刀神社の南側に接している。轟三と土地より分譲住宅建設の目的で、土木工事等に伴う発掘届が提出されたため、文化庁・府教委等関係者とともに協議のうえ、事前に発掘調査を実施した。調査は重機を使用して、耕土・床土を除去して実施した。

調査地区の中央部で層序を観察すると耕土(0.1m)、床土(0.2m)、灰褐色土(0.1m)、暗褐色土(0.3m)、砂礫気味の黄褐色土と堆積している。灰褐色土・暗褐色土には弥生式土器から須恵器まで各時期の遺物が含まれている。

(A) 遺構 (図版第9・87)

遺構はいずれも黄褐色土層上面で検出され、層位的には区別できないが弥生時代、古墳時代、奈良時代、平安時代の遺構に分けることができる。

(1) 平安時代の遺構

調査地区の全域から多数の柱穴が検出されている。柱穴の形状に著しい相違があり、建物としてまとめることができたのは 6 棟である。柱穴から出土する遺物は弥生式土器や須恵器などとともに、灰釉陶器の破片が出土することからみて平安時代のものが主であると考えられる。建物の他に溝がみられるが、建物に伴うものかどうかは不明である。

掘立柱建物跡(HH₁)は、調査地区東北部で検出した 2 間(柱間 1.8 m) × 2 間(柱間 1.8 m)の正方形の建物である。主軸の方向は N-28°-E である。

掘立柱建物跡(HH₂)は、調査地区中央部で検出した 1 間(柱間 2.0 m) × 3 間(柱間 1.25 m)の南北に長い建物である。主軸の方向は N-10°-E である。

掘立柱建物跡(HH₃)は、H₁H₂ の東北部で検出した 2 間(柱間 1.6 m) × 2 間(柱間 1.9 m)の少し南北に長い建物である。主軸の方向は N-17°-E である。

掘立柱建物跡(HH₄)は、調査地区南西隅で検出した 2 間(柱間 1.68 m) × 2 間(柱間 1.84 m)の少し東西に長い建物で、束柱をもつことから倉と考えられる。

掘立柱建物跡(HH₅)は、調査地区中央部南寄りで検出した 2 間(柱間 1.84 m) × 2 間(柱間 2.12 m)の少し南北に長い建物である。主軸の方向は N-12°-E である。

東西溝は、4 号方形周溝墓付近から南北に幅 0.5 ~ 0.8 m、深さ 0.2 m 程度のもので約 18 m 検出された。調査地区南部にこの溝のつづきがあり、約 20 m にわたって掘さくされたらしい。

(2) 奈良時代の遺構

9 基の七塙墓と 1 棟の掘立柱建物跡が検出されている。土壙墓の多くが不整形を呈していて、方向性に一定の法則はなくグループごとにまとめることが不可能である。

1 号土壙墓(D₁)は、4 号方形周溝墓の東側周溝の内縁に位置するもので、長さ 1.6 m、幅 1.0 m を測り、片方の溝が狭くなる。内部から須恵器・土師器の破片が出土している。

2 号土壙墓(D₂)は、長さ 1.8 m、幅 0.6 m、深さ 0.1 m を測るもので、ほぼ長方形であるが壁が不直である。底は平坦である。

3 号土壙墓(D₃)は、長さ 1.9 m、幅 1.0 m、深さ 0.25 m を測り、隅丸方形を呈し底は平坦である。

4 号土壙墓(D₄)は、長さ 1.55 m、幅 0.8 m、深さ 0.2 m を測り、ほぼ長方形で底は平坦である。

5 号七塙墓(D₅)は、長さ 2 m、幅 1.1 m、深さ 0.45 m を測る。不整形で底は舟底状になっている。

6 号土壙墓(D₆)は、長さ 2.1 m、幅 1.3 m、深さ 0.4 m を測る。不整形で底は舟底状である。

7 号土壙墓(D₇)は、6 号土壙墓によって東端を破壊されているが、長さ 2.0 m 以上、幅 0.75 m、深さ 2.0 m を測る。不整形で底は平坦である。

8 号土壙墓(D₈)は、長さ 2.4 m、幅 1.2 m、深さ 0.5 m を測る。隅丸方形で底はほぼ平坦である。9 基中最大規模のものである。

9 号土壙墓(D₉)は、長さ 1.8 m、幅 0.75 m、深さ 約 0.5 m を測る梢円形のもので底はほぼ平坦である。この土壙墓西壁の上面から須恵器の長頸瓶や土師器の破片がみられ、人頭大の塊石が数個検出された。この塊石は土壙墓に盛られた若干の盛土を補強するために置かれたものであろう。須

恵器等は土壤内に副葬せずに盛土上におかれたものと考えられる。掘立柱建物NH₄は、調査地区東南部に位置するもので2間(柱間1.68m)×3間(柱間1.52m)の東西に長い建物である。方向N-E-Eである。当調査地区的南側で同一方向の建物が検出されており、この建物もそれらの建物と同様奈良時代のものと考えられる。

(3) 古墳時代の遺構

調査地区東側で2基の堅穴式住居が検出された。堅穴式住居は付近で検出されているものと同様方形プランを呈するものである。

堅穴式住居址(KH₁)は、方形プランを呈し長辺5.3m、短辺5.1mを測る。東北隅は調査できなかったが、周壁下に幅約0.2mの溝が掘さくされている。柱穴は東北隅の1個を除いて直径0.3~0.4mの柱穴がみられる。床面はほぼ平坦で、内部から布留式併行の鉢や高杯が検出された。

堅穴式住居址(KH₂)は、KH₁の北隣に位置し、大部分は調査地区外のため西北隅しか調査できなかったが、周壁下に幅約0.4mの溝を掘さくした方形堅穴式住居址である。調査した範囲では一辺4.5m以上を測り、床面の西北隅に直径0.5m、深さ0.2m程度の柱穴がみられ、床面はほぼ平坦である。内部から遺物はほとんど検出されなかつたがKH₁と同時期のものであろう。

(4) 弥生時代の遺構

方形周溝墓2基と壺棺墓1基を検出した。

4号方形周溝墓は、調査地区西北部で検出されたもので、幅1.8m、深さ約0.5mの周溝に囲まれたもので周溝内縁は東西約7.0m、南北7.0m以上で南北にやや長く、東北部に幅約2.0mの陸橋部がみられる。周溝内には弥生式土器から須恵器までが混入しているが、西側周溝内には畿内第Ⅲ様式土器のみが検出されているので、この周溝墓は第Ⅲ様式期と推定される。

周溝内側に6基の土壙墓が検出されている。後述するように周溝が埋没した段階に設けられた土壙墓と同時期のものが混っている可能性があるが、出土遺物はほとんど無いため明確さを欠く。とりあえず、ここでは一応4号方形周溝墓の主体部として報告することにする。

1号墓壙は長さ2.0m、幅1.5m、深さ0.23mを測る。長方形を呈し、南側周溝と同一方向である。2号墓壙は周溝内側西南隅に位置し、長さ1.9m、幅0.8m、深さ0.26mを測る長方形墓壙である。3号墓壙は長さ1.7m、幅1.1m、深さ0.1mを測る長方形墓壙である。4号墓壙は長さ1.6m、幅約1.0m、深さ約0.3mの不整形墓壙である。この墓壙は3号墓壙によって北側を削られている。5号墓壙は長さ1.8m、幅0.7m以上、深さ0.15mを測る。規模からみて小児用の墓壙であろう。6号墓壙は長さ2.0m、幅0.7m、深さ0.2mを測る長方形墓壙で5号墓壙より新しい。

5号方形周溝墓は、4号方形周溝墓の西側周溝を共有して接するもので、幅1.7m、深さ0.4mを測る南側周溝の一部しか確認することができなかつた。時期については不明である。

壺棺墓は、4号方形周溝墓の東側周溝外縁部に位置するもので、周溝が埋没した段階で設けられたものである。直径0.7m、深さ0.15mを測る円形の掘り方内に口縁部を打ち欠いた第Ⅶ様式期の壺を横倒しにして、頭部に別の壺の底部をかぶせるような格好で検出された。

(5) 遺物(図版第26)

壺棺として使用されていた土器(図版第26-1)は、最大腹径約40cmを測る球形の胴部に、直径

約5cmの小さな底部のつく壺内第Ⅴ様式期の壺である。頸部は外反気味で、二重口縁部を意識的に打ち欠いている。外面はタキ整形後、丁寧に縱方向の磨きを加えている。また、頸部つけ根には断面三角形の突帯を一条貼りつけている。打ち欠いた頸部にかぶせてあった壺の底部（図版第26-2）も、1と同じ器形の壺で、丁寧な磨きが施されている。また、1の内部から2と同一個体とみられる頸部から胴部にかけての破片が若干検出されている（図版第26-2'）。

堅穴式住居址（N-H₁）から出土した土器は、布留式併行期の鉢（図版第26-3）と高杯の脚部（図版第26-4）である。鉢は半球形の体部から斜め上方に口縁部があり、口縁部に1条の浅い沈線を施す。外面は粗い刷毛調、内面は刷毛調整後ナデ調整、口縁部内外面は横ナデを施している。高杯の脚部は斜下方に裙が大きく折り、3個の円形穿孔がある。（横本）

10. 7-C・G地区の調査

高麗市清福寺町789-1, 790-2番地にあたり、小字名は清福ノ内と称する。現状は畑であるが、分譲住宅建設の目的で土木工事等に伴う発掘届が提出され、文化庁・府教委等関係者とも協議のうえ、事前に発掘調査を実施したものである。

調査は、重機によって耕土・床土・灰褐色土層（整地層）を除去したのち、遺構面の検出につとめた。

(A) 遺構（図版第10・11・89）

遺構としては、弥生時代の溝（南北溝）および井戸1基、弥生～古墳時代にかけての住居址1基、奈良時代の土器棺墓1基と時代不明の柱穴数個、落ち込みがあげられる。

まず土層の概略をのべると、耕土（0.15m）、床土（0.15m）、灰褐色土層（0.15～0.25m）、暗茶灰色土層（0.2～0.3m）、暗褐色土層（0.1～0.2m）となり、地山へ達する。

灰褐色土層は整地層で、瓦器片・燈明皿片が検出され、古式七輪器や弥生式土器等は検出されなかった。暗茶灰色土層も整地層と考えられ、奈良時代および古墳時代の土器片や、弥生式土器片が検出された。暗褐色土層は、弥生式土器（後期）を包含する層である。

土器棺墓は、調査区西壁中央で検出され、暗茶灰色土層内に掘り方をもつ。方位はN-18°-Wである。土器は、把手付場を南に、長手の甕を北に配置して、合口にしている。合せ目には粘土等を巻きつけた痕跡は認められなかった。また土器を安定させるため、掘り方下方にこぶし大ないしはやや大きめの石を土器の輪郭に合わせて配列している。土器棺の内容物は認められず、すでに腐食・流出したものと思われ、落ち込んだ土器片が若干検出されただけである。

土壙墓は、調査区の中央やや北よりで、住居跡と重複した形で検出された。土器棺墓と同じく暗茶灰色土層内に掘り方をもつ。方位はN-1°-Wである。上方の長径1.45m、短径0.8m、底部長径1.15m、短径0.45m、深さ0.7mを測る。土器器皿および甕片を検出した。

住居址は、中央やや北寄りで検出された。周溝が2本めぐっており、建て替えが考えられ、4柱穴もそれに対応して、2穴1組で検出されている。断面の観察から、内側のものが古く、外側のものが新しいことがわかる。内側のものは、南北4.9m、東西8.9m以上を測り、ほぼ方形を呈する。外側のものも同様の形態をとり、南北5.4m、東西4.1m以上を測る。中央に焼土を包含したビッ

トを検出したが、どちらの住居址に伴うかは、連断できない。ピット自身は、わずかに焼けた痕跡が認められ、炉の可能性がある。また、調査区東壁断面に、床面下および南壁外方に黄褐色土層が確認された。これは、住居址を構築する際に、堅穴の底部および周縁に張り床、ないし壁を形成する材料として用いられたものかもしれない。というのは、住居址東半部は、後で述べる弥生時代中期の溝の上にあたるため、防湿の役目を果たしたものと理解される。出土遺物としては、上層から布留式土器、下層からはほとんど出土せず、わずかに周溝内から土師質の土器細片および炉と思われるピット内からタタキ目を有する土器底部片および鉢の口縁部が検出された。また床面から炭や焼土が検出され、火災にあって放棄された可能性が考えられる。その他の遺物としては、西辺中央に砾石が1個検出された。

住居址の時期は、上層に布留式期の土器群が形成されているところから、下限としては布留式直前の時期が考えられ、上限としては、南側から検出した井戸の時期から、畿内第Ⅶ様式後半が考えられる。ただ、調査区全域をみたときに、庄内式土器ないしそれに併存する土器が検出されなかつたことから、第Ⅶ様式の可能性が強い。

井戸は、調査区南寄りで検出された。径は円形を呈し、上端で径1.75m、底部で0.6m、深さ1.1mを測る。層位的には3層に分かれ、上層はこぶし大の石と、破碎された土器を多量に含む層で、厚さ0.6mを測る。中層は、上層と土質的には似かよっているが、検出した土器に比較的復元できるものが多く、また上層との境目に炭層が存在している。厚さは0.3mを測る。下層は遺物をほとんど含まず、茶褐色粘土質で充たされており井戸底であったことがうかがえる。時期は、畿内第Ⅶ様式後半に位置づけられる。なお、中層から破碎された壺が投棄された状態で出土していて、興味をひくところである。

溝は、調査区東辺を東へ曲がって南流する。層位は、上方から暗灰褐色土層(Ⅱ様式～Ⅶ様式)、茶褐色土層(Ⅱ様式)、暗青灰色粘土層(Ⅱ様式)とつづいて、溝底に達する。当初、芥川が形成した河岸段丘かと思われたが、調査区北側で溝の東肩の下端が検出されたことから、溝と断定した。また溝の西岸の傾斜角度が50°近くあり、急峻などころから人為的に掘さくされたものと考えられる。上端での溝幅は不明だが、溝底中心線から折り返して推定すると、3m前後となり、溝底幅は0.7～0.8mを測る。溝底には、雑然とした石列がみられ、人為的なものか、自然に落下堆積したものか、明確にはしないが、石列下方に第Ⅱ様式土器が検出され、溝掘さく後、ある程度時間経てからのものと考えられる。また溝底の傾斜角度は緩く、ほとんど灌水していたものと思われる。事実、下層の暗青灰色の土層は、砂粒を含まない粘土質であった。以上のことから、この溝を、集落を区画するものと考えることも可能である。遺物としては、第Ⅱ様式と第Ⅶ様式の土器があるが、第Ⅶ様式の土器は上層の暗灰色土層に第Ⅱ様式の土器と混在して検出されたもので、茶褐色土層以下では、第Ⅱ様式土器のみが純粹な形で出土している。中でも、石列上面に一塊となって出土した土器は、壺・鉢・壺などの器種を含むもので、一括資料として呈示できる。その他の遺物としては、石列中に混じって、砾石が1点出土している。

(B) 遺物(図版第27～28)

当地區から出土した遺物は、ほとんど土器で、その他にはさきに述べた砾石が2点出土したのみ

である。以下土器について概略を述べることにする。一応全形を知りうるものと、観察表にまとめた（表1～4）。

南北溝出土の土器（図版第27・28・34～36、表1）

溝の埋土は3層に分れ、いずれの層からも第II様式土器が出土している。とくに下層出土の土器類と、中層の石列上にある土器群との間には明確な型式差が認められる。土器群から検出した壺（図版第27-3・4など）は胴部が張り出し、やや丸味を帯び、口縁部が外輪気味に外反することなど第II様式壺の一般的な形態を示している。それに対し、下層の壺（図版第28-1）は胴部の張り出しがほとんどなく、口径が腹径を上回り、口縁部が水平方向に短く外反するなど、第I様式のものに近似した形態をとっている。また、壺（図版第34b-1）は、それほどではないが、やはり口縁部の外反の度合が短く、古い様相を示している。壺をとっても、上層のもの（図版第27-1）は大きく外反する口縁部と球形の体部を有する典型的な第II様式のものであるが、下層の壺（図版第34b-2）は、器壁が厚く、砂粒を多く含み鈍重な感じがする。さらに溝の北側の石列中から出土した鉢（図版第34a-3・4）には瘤状把手の退化したものがつくなど、第II様式土器としては古い様相をもっている。上層からも、第II様式土器が出土しているが、すべて破片（図版第35a-1～5）であり、しかも、第III・第IV様式土器（図版第37a-5～13）が多く混在している。これらは、土砂の流入時に混入したものと考えられる。以上のことから、この南北溝は第II様式の古い段階に掘さくされ、少なくとも第II様式末まで機能し、中期末までに埋没したと考えられる。

つぎに、溝の石列上方にあった土器群について少しみてみる。この土器群から壺が7個体（うち1つは底部片）検出されたが、そのなかに体部上方に穿孔したものが2例認められた。いずれも土器の耐用限界まで使用されたのか、器表面が火熱によって著しく剝離しており、土器が破碎する前に穿孔して、投棄されたものと考えられる。この土器群の一括資料としては、ほかに壺・鉢・瓶底部が検出されている。土器群の性格については、日常的に機能しなくなった土器の捨て場所として形成されたものと考えるのか、壺・壺・鉢をセットして何らかの祭祀に用いられた一群としてとらえるのかのどちらかであろうが、おそらく後者と思われる。その他、中層から流水文をほどこした壺片が2点（図版第35a-11・12）検出されている。1つは、上下の構造直線文を弧状の反転部でつないだもので、佐原真氏のいうC反転挿入手法にあたる。いま1つは、構造直線文に扇形文を配した、E反転挿入手法である。

この南北溝の検出および、出土土器によって、郡家川西遺跡の農耕集落の出現期が明らかになったことは意義深い。

井戸出土の土器（全形を知りうるもののみ表2に記した。図版第29～32・37b）

出土土器は若干の中層の土器片を含むものの、大部分は第V様式に属するものである。器種としては、壺・鉢・高杯・壺等が認められる。一括資料としては比較的良好なものである。時期的には、文様を有する二重口縁壺（図版第37b-6）や、受口状口縁の退化した形態を有する壺（図版第31-1・4）の在り方などから、第V様式の中でも後半に比定される。

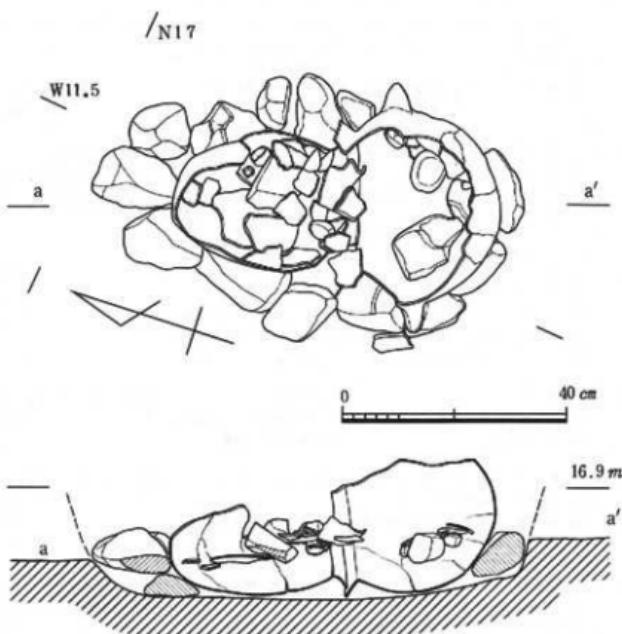
住居址上層土器群出土の土器（図版第32・38、表3）

布留式併行期と考えられ、器種としては、壺・小形丸底壺・壺・小形鉢・深鉢・高杯・小形器台

等があげられる。全体として明るい淡褐色系統の色調を呈し、胎土は砂粒を多く含んでいる。ただ、小形鉢6・7は、胎土に砂粒を含まない非常に良質の粘土を用いており、ヘラミガキ仕上げも極めてていねいである。布留式併行期の中で、小形精製土器の盛行した古相の時期と考えられる。また、深鉢8は他にあまり類例をみないので、この時期の器形としては特異なものである。なお、住居址上層から、縄文式土器（船橋式）が1点出土している。

奈良時代の土器（図版第38）

土器棺墓に使用された北棺4は、長手の胴部に外反する口縁部をとりつけた壺で、全体を細かな刷毛目で仕上げている。蓋の付着はみられなかった。穿孔等の痕跡も認められない。南棺3は、球形の体部に外反する口縁部をとりつけた把手付壺で、胴部中位に対面の形で把手がついている。把手は中実ではなく、体部に穿孔後、中空の把手を挿入している。時期は奈良時代と考えられる。また、土壙墓から検出された壺は、形態・手法からみて、先の北棺と同一時期のものと考えられる。なお、土壙墓からは他に土師皿片が検出されている。（森田）



挿図1 土器棺墓実測図

7-C・G 地区 南北溝土器群および南北溝出土 第Ⅱ様式土器観察表(表1)

器種	図版	法量	口 頭 部	体 部	底 部	備 考
壺	27-1	口 径 19.6 器 高 40.3 腹 径 32.6 底 径 9.0	・縮くしまった徑かい頭部 から大きく外反する・端部 は面をもち、下方に刻目文 をめぐらす。外面複合痕有 ○頭部外面とも刷毛調整 ○口縁部上面は刷毛調整、 下面ヨコナダ	・肩部は綫長の球形を呈す ・頸部～胴部中位に7条の 横波状文を7帯ほどこす ○外面上位は細かな刷毛調 整後なるくナダる。外面中 位は横方向、下位は縱方向 の彫磨き。内面はナダ調整	・平底、大半欠失	○灰褐色 ○良
鉢	27-2	口 径 19.5 器 高 14.1 腹 径 20.0 底 径 6.0	・内側したのち底口する。 上端部は面をもち内側へわ ずかに肥厚する ○内外縁部ともヨコナダ	・斜め上方へ大きくなり る ○外面は縱方向の彫磨き ○内面はナダ調整	・平底、中央部が凹む ・2つの葉脈痕を有す	○茶褐色 ○良 ・外面・内面中位に 縦付着
壺	27-3	口 径 23.0 器 高 33.1 腹 径 25.2 底 径 ...	・斜の上方へ外寄し上縁で 水平近くなる。端部は面を もつ ○外面縦方向、内面横方向 の刷毛調整。端部ヨコナダ	・胴部中位でわずかにふく らむ・上方に径4cmの円孔 を外側から穿つ ○外面は刷毛調整。内面は ナダ調整	・平底、大半欠失	○灰褐色 ○良 ・外面・内面下方に 部分的に縦付着・外 面全体削離が激しい
	27-4	口 径 20.3 器 高 26.4 腹 径 19.8 底 径 5.9	・斜め上方へ外反し上縁で 水平になる。端部は面あり ○外面は刷毛調整後ヨコナ ダ。内面は刷毛調整	・肩部中位でわずかにふく らむ・上位に径2cmの円孔 を外側から穿つ ○外面は刷毛調整。内面は ナダ調整	・平底、中央部が大き く凹む	○灰褐色 ○良 ・外縁縦付着、下半 部は剥離激しい。器 壁は薄い
	28-2	口 径 19.0 器 高 25.8 腹 径 18.1 底 径 5.7	・斜め上方へ外反し上縁で 水平になる。端部はわずか に下方へ突出し刻目文をほ どす ○外面不明・内面刷毛調整	・中位でわずかにふくらむ ○外面は縦方向の刷毛調整 ○内面はナダ調整	・平底、中央部はわざ かに凹む・底裏に葉脈 痕あり・内面に指開跡 有。外面に剥離あり	○灰褐色 ○砂質 ・風化している
	28-3	口 径 27.7 器 高 ... 腹 径 29.2 底 径 ...	・斜め上方へ外寄し上縁で 水平になる。端部は面を有 し下方へわずかに突出する ○内面は横方向の刷毛調整 ○外縁刷毛調整後ヨコナダ	・肩部中位でわずかにふく らむ ○外面は縦方向の刷毛調整 ○内面は上方が横方向の刷 毛調整。大半はナダ調整	・欠失	○灰褐色 ○良
鉢	27-5	口 径 一 器 高 一 底 径 6.5		・大半欠失 ○外面は縦方向の刷毛調整 ○内面はナダ調整	・平底、底裏は凹面を 呈す	○灰茶灰色 ○砂質
壺	28-1	口 径 16.2 器 高 19.9 腹 径 14.6 底 径 6.6	・水平方向に近く外反する ・端部は面をもつ ○内面は横方向の刷毛調整 ○端部はナダ調整	・は淡上方に立ちあがる ○外面は刷毛調整。内面は ナダ調整	・安定した平底	○灰褐色 ○良 ・壺Ⅰ様式に近い形 態・縦付着なし
	28-4	口 径 15.4 器 高 20.1 腹 径 16.4 底 径 5.4	・斜め上方へ外反し上縁は 水平・端部わずかに面あり ○外縁とも刷毛調整後、 底 径 5.4 ヨコナダ	・大半欠失、肩部中位でわ ずかにふくらむ ○外面は刷毛調整。内面は ナダ調整	・平底、中央部は凹む ・底裏に木葉痕あり	○茶褐色 ○良 ・外縁に縦付着・器 高、底径は概定値

〔備考〕1. 図版27-1は、図版第27の上器番号1に対応する。2. 口縁部、体部、底部の・は形容、○は手筋をあらわす。

2. 備考欄の1段目は色調、2段目は胎土の質をあらわす。

7-C・G 地区 井戸出土 第V様式土器観察表(表2)

器種	因版	法量	口 端 部	体 部	底 部	備 考
壺	29-4	口 径 11.5 器 高 19.0 腹 径 17.8 底 径 4.2	・頸部は上方へたらあがり 口縁部で外反する ○上縁部を強くヨコナデ後 端部をナデ調整。内外面ともナデ調整	・イチジク形 ○外面は縦方向の荒筋き。 内面は中位下半が刷毛調整 上半がナデ調整	・平底。中央部がわずかに凹む	・褐色 ・良 ・体部下半に縫付跡
	30-2	口 径 11.2 器 高 18.4 腹 径 16.2 底 径 5.0	・斜め上方へ外反する ○内外面ともヨコナデ	・やや肩の張った球形 ○外面タタキ整形後ナデ調整。 頸部に刷毛目のある。 内面は中位以下刷毛調整、 上半ナデ調整	・平底	・灰褐色 ・砂粒を多く含む ・体部下半に縫付跡 ・底部は赤く焼けた
	29-1	口 径 15.5 器 高 24.6 腹 径 26.3 底 径 4.2	・頸部は上方へたらあがり 口縁部は大きく外反する 端部は両面をもち1条の芯線 をほどこす ○口縁部内外面はヨコナデ 頸部は外面が縦方向。内 面が横方向の荒筋き	・腹部の張った扁平な形を 呈す ○外面は刷毛調整後右下り の荒筋き。内面下半は刷毛 調整後ナデする。上半はナデ 調整	・突出した平底。中央 は強く凹む	・灰褐色 ・良
鉢	29-3	口 径 8.5 器 高 12.7 腹 径 10.1 底 径 3.6	・上方へたらあがる。上縁 では内骨ぎみ ○手法不明	・中位がややくらんだ縦 長の球形 ○外面手法不明。内面はナ デ調整	・平底。中央に径5mm の凹みがある ○外面に指押痕あり	・淡褐色 ・砂粒を多く含む ・風化が激しい
	30-4	口 径 15.3 器 高 6.2 底 径 3.6	・内骨ぎみに薄くおわる ○内外面ともヨコナデ	・斜め上方へたらあがる ○内外面とも荒筋き	・平底 ○外面に指押痕あり ○内面は指先で調整	・淡茶褐色 ・良 ・底部外面に指紋痕
	30-5	口 径 12.5 器 高 8.5 腹 径 一 底 径 4.4	・斜め上方へ外反し上縁で 屈曲して底直にたらあがる ○内外面ともヨコナデ	・半球形を呈し上方ではた らあがり骨ぎみ ○外面は刷毛調整後ナデする ○内面は指ナデ調整	・平底。中央が凹む。 外縁に結合痕あり	・淡茶褐色 ・砂質
盤	30-6	口 径 16.2 器 高 17.7 腹 径 15.7 底 径 4.8	・斜め上方に大きく外反す る ○内外面ともヨコナデ	・縦長の球形 ○外面はタタキ整形(2段 階)。内面はナデ調整	・縦長の球形	・淡褐色。やや窪い ・全体に剥離激しい ・下半部赤焼け。口 縁部・体部に縫付跡
	31-4	口 径 13.5 器 高 16.1 腹 径 14.4 底 径 4.7	・斜め上方へ内骨ぎみに外 反する。端部は薄くおわる ○風化のため手法不明	・縦長の球形 ○外面はタタキ整形。内面 は刷毛調整後ナデ調整	・平底。中央がわずか に凹む	・淡茶褐色 ・砂粒を多く含む ・下半部に縫付跡、 底部付近赤く焼けた
	30-6	口 径 12.4 器 高 16.0 腹 径 13.7 底 径 3.8	・上方へ指でつまんがよう にたらあがる ○内外面とも軽くヨコナデ	・縦長の球形 ○外面は細かいタタキ整形 後、腰台部をナデ調整。内 面はナデ調整	・突出した平底	・淡茶褐色 ・やや砂質 ・縫付跡せず
31-1	口 径 15.0 器 高 20.9 腹 径 16.0 底 径 4.7	・受口状口縁の退化形式。 たらあがり部下方に1条の 芯線をめぐらす ○内外面ともヨコナデ	・縦長の球形 ○外面タタキ整形後腰台部 付近を刷毛調整。内面下半 は刷毛調整後ナデ調整。上 半は指ナデ調整	・突出した平底。中央 部がわずかに凹む	・良	
	32-1	杯口径 24.0 器高 16.0 腹高 17.7	・斜め上方へたらあがる。 上縁部は外 反してひらく。底部は内骨氣味に斜 め下方へのびる ○口縁部内面は横方向外面は縦方向の 荒筋き。底部内外面とも荒筋き	・柱状部は空平。斜め下方へのびる。中 位で盛出し唇部は大きいかくらく。端部は 面をもつ。端部上位に孔を穿つ ○外面は横方向の荒筋き。内面はナデ調 整	・良	・淡褐色 ・良 ・杯部と脚部の接合 は円錐光沢法である
器種	因版	法量	杯 部	脚 部	備 考	
高 杯						

7-C・G地区 住居址出土 布留式土器観察表(表3)

器種	回収	法量	口 嘴 部	体 部	底 部	備 考
小形丸底型	32-2	口 径 一 器 高 一 腹 径 9.4 底 径 一	・欠失	・腹部の張った錐球形 ○外面は刷毛調整後ナデ調整、肩部はヨコナデ○内面はナデ調整(上半は指ナデ調整)	・丸底	○灰褐色 ○良 砂質
	32-3	口 径 13.9 器 高 一 腹 径 11.2 底 径 一	・外上方へ内壁ぞみにたらあがる・端部は薄くおわる ・頸部はくの字状を呈し、内面に複雑を有する ○内外面とも手法不明	・著しく扁平で受皿状をなす ○外面手法不明。内面は削取りのあと荒削き	・欠失	○灰灰褐色 ○良 細砂粒を多く含む ・風化が激しい
	32-4	口 径 12.0 器 高 一 腹 径 9.2 底 径 一	・柄の上方へ大きく開く・端部は薄くおわる・中位外腹にわずかに複雑を有する ○内外面とも手法不明	・錐球形 ○外面手法不明。内面は削取り	・欠失	○灰灰褐色 ○良 砂粒を含む
	32-5	口 径 16.0 器 高 一 腹 径 11.4 底 径 一	・内壁ぞみに斜め上方へ外反する・端部は因をもら内側へわざかに肥厚する ○内外面とも荒削き	・肩の張った球形 ○外面刷毛調整後ナデる、肩部はヨコナデ。内面は横方向の荒削り	・欠失	○灰白色 ○良 砂粒を含む
小形鉢形	32-6	口 径 17.8 器 高 16.2 腹 径 一 底 径 一	・内輪気味に直口する・端部は平底で面をもら内側へわざかに突出する ○調整不明	・扁平な半球形 ○外面は縦方向の刷毛調整 ○内面は削取りの後ナデ	・平底・体部との境不明瞭 ○内外面とも調整不明	○灰褐色 ○良 砂質
	32-6	口 径 15.5 器 高 5.5 腹 径 一 底 径 一	・水平方向へ外反後、斜め上方へたらあがる ○内外面ともヨコナデ後、細かい荒削き仕上げ	・扁平な半球形を呈する ○内外面とも横方向の細かい荒削き仕上げ。内面には削取りの痕跡が認められる	・丸底	○褐色 ○良 細砂粒含む ・器壁薄い、口縁部1.5mm、底部3mm ・口縁部内面に横痕あり(6mm×2mm)
	32-7	口 径 14.9 器 高 4.8 腹 径 一 底 径 一	・水平方向へ外反後、上方へたらあがる・上端部は外輪ぞみ ○内外面ともヨコナデ後、細かい荒削き仕上げ。内面に削取りの痕跡あり	○内外面とも横方向の細かい荒削き仕上げ。内面には削取りの痕跡あり	・丸底	○灰灰褐色 ○良 ・器厚は口縁部で1.5mm、底部で4.5mm
高杯	32-1	杯部径 6.5 器部径 11.0 器 高 8.8	・わずかに上方へたらあがり、端部は薄くおわる・たらあがり部外面中位はわずかに凹む ○内外面ともヨコナデ。器部内面は荒削き。外面手法不明	・斜め下方へ開く・端部にわずかに面をもつ・中位に3孔を穿つ ○外面は横方向の荒削きか。内面は削取りのあと刷毛調整		○灰褐色 ○砂質 ・風化が激しい
	32-2	杯部径 一 器部径 12.4 器 高 一	・欠失	・柱状形は中空で下方へ開く・端部はわずかに面をもつ・屈曲部に3孔を穿つ ○内外面とも調整不明		○灰褐色 ○砂質 ・風化が激しい

ア-C・G 地区 壺檜墓 奈良時代土器観察表(表4)

器種	図版	法 線	口 頭 部	体 部	底 部	備 考
壺	21-2'	口 径 23.8 高 31.9 腹 径 一 底 径 一	・斜め上方へ外反する・端部は面をもつ ・外面はヨコナデ・内面は 刷毛調整	・長脚形 ・外周は刷毛調整・内面は 指ナデ調整後、上半部を横 にナゲる	・丸底・内面に押圧痕 あり	・灰茶褐色 ・良 ・蓋付着は認められ ない・北棺
鍋	21-2"	口 径 27.2 高 30.0 腹 径 32.0 底 径 一	・斜め上方へ外反する・端部は面をもつ ・内外面とも刷毛調整後、 ヨコナデ	・球形・中位や上方に 1 対の把手を有する ・外面は刷毛調整・内面は ナデ調整(一部が墨脱りの 痕跡と思われるものあり) ・中空の把手は、体部を穿 孔後挿入して指でなでつけ て接着している	・丸底・内面に押圧痕 あり	・灰褐色 ・良質 ・南棺

11. G-M・N 地区の調査

高槻市清福寺町 886-1番地にあたり、小字名は大畑と称する。現状は水田である。周囲一連の分譲住宅建設の目的で、土木工事等に伴う発掘届が提出されたため、文化庁・府教委等関係者とも協議のうえ、事前に発掘調査を実施した。

調査は、重機によって耕土(約0.15m)、床土(約0.15m)を除去し、東側の低地に堆積した黒褐色土層(包含層)については人力によって耕土した。地山面は黄褐色粘土～礫層で、その西側4分の3は平坦であるが、東側は比高差0.5mを測り、急に傾斜する地形である。

遺構・遺物(図版第12、13・88・89・88)

検出した遺構は、奈良時代の掘立柱建物跡・土墻と弥生時代の堅穴式住居跡がある。

(1) 奈良時代の遺構・遺物

掘立柱建物跡(NH₅)は、西側で検出された2間(柱間2.45m)×5間(柱間1.89m)の南北に長い比較的大きな建物である。西側の同一軸のNH₆・NH₇と一緒にをするものであろう。出土遺物は柱穴から土器の細片が少量検出されているが、詳細な時期については不明である。その他、旧石器時代に属する風化の著しいサヌカイト片が1点ある。主軸はN-2°-Wである。

掘立柱建物跡(NH₆)は、中央部で検出した2間(柱間2m)×5間(柱間2.12m)の東西に長い建物である。柱穴の掘方は0.8m×0.5mの円形プランの小さなもので、深さも浅く約0.2mを測り、西北部の2個の柱穴は削平されて検出することができなかった。時期は柱穴の切合い関係からNH₅よりも新しいことが知られる。主軸はN-0°-Wである。遺物は検出できなかった。

掘立柱建物跡(NH₇)は、中央部で検出した2間(柱間1.9m)×2間(柱間1.7mと3.8m)の南北に長い小さな建物である。柱穴の大きさはNH₆とはほぼ同じで、深さも0.2mと浅い。主軸はN-1°-Eである。

掘立柱建物跡(NH₈)は、東側の地山面が急に傾斜する変換地で検出した2間(柱間2.25m)×

3間（柱間2.46m）の南北に長い建物である。主軸はN H₃と同じで、北梁はN H₅の南梁の延長線上に位置する。

掘立柱建物跡（N H₉）は、N H₈のすぐ北側で検出した2間（柱間1.9m）×3間（柱間2.1m）の南北に長い建物である。西桁はN H₈の延長線上に位置し、規模はN H₈より少し小さい。

土壙（D₁）は、N H₈の南側で検出した長辺2.8m、短辺1.6m、深さ0.2mの長方形の大きなもので底面はほぼ水平である。西辺近くには小さな柱穴が6個認められる。遺物は、奈良時代の土師器・須恵器片が少数出土した。出土遺物・位置・構造からみて、N H₈に付属したものであろう。

土壙（D₂）は、N H₈の南側で検出した長辺約1.6m、短辺0.6m、深さ0.25mの長方形の土壙である。東西端は柱穴と重複するため不明である。遺物は、土師器片が少量出土した。

土壙（D₃）は、南側中央部で検出した長辺約1.2m、短辺0.8m、深さ0.1mの楕円形の浅い土壙である。遺物は、土師器片が少量出土した。

土壙（D₄）は、南側中央部で検出した長辺1.5m、短辺約0.7m、深さ0.2mの長楕円形を呈する土壙である。出土遺物はない。

土壙（D₅）は、東側で検出した深さ0.5mの不整形の大きな土壙である。東側は調査区域外のため検出することができず不明であるが、他の土壙に比べて、遺物は特に多く出土した。出土遺物は、赤生式土器・土師器・須恵器片であるが、完形品になるものがなく土器窯に近いものと考えられる。
(大船)

12. 6-J・K・N・O 地区の調査

高根市清福寺町887番地にあたり、小字名は大畑と称する。現状は水田であるが、分譲住宅建設の目的で土木工事等に伴う発掘届が提出され、文化庁・府教委等関係者とも協議のうえ、事前に発掘調査を実施した。

(A) 遺構（図版第14・15・90・91）

調査区全域を重複で包含層まで掘り下げ、遺物の検出につとめるとともに、遺構面を追求した。その結果、遺構は地山面上に検出され、包含層は単層であることがわかった。層序は、耕土（0.1m）、灰褐色砂質土層（0.2m）、茶褐色土層=遺物包含層（0.3m）で、以下地山になる。

(1) 平安時代の遺構（図版第91）

井戸は、石組の井戸である。掘り方は、南北3.4m、東西3mの方形を呈し、現存の深さは3.4mを測る。井戸の内径は、上辺が1.5m×1.8mのほぼ方形で、東側で若干張り出している。下辺は、南北0.8m、東西0.95mの方形である。ただ下辺の軸線と、上辺の軸線に9°のずれがあり、上方と下方ではねじれの位置にある。掘り方との相対関係では、石組下縁がほぼ掘り方の中心に位置しているのに対し、上縁ではねじれて組み上げたために東の方にずれ、掘り方の軸線とも必然的にずれを生じている。石組みの方法は、まず最初に1辺25cm前後のほぼ立方体の石を組みつけた後、石を小口積・平積相半ばにして積み上げている。また石の大きさも、詰め石を除いて、横幅80cmもあるものから、1辺10cm前後の小さなものまで、種々用いられている。これらのことから、石組がねじれて積み上げられた要因と考えられて、井戸組の工法からいえば稚拙な感じがする。石材は、河

原石を主に用い、一部に花崗岩の割石や砂岩が認められた。層位的には上層（茶褐色土層）と下層（暗灰色泥土層）に大きく分れ、上層にはほとんど遺物を含まず、わずかに土器器の細片や瓦器片がみられた。下層は、泥土を中心としながらも、相互に薄い砂礫層を含むもので、遺物の多くは下層から検出されている。遺物は黒色土器・燈明皿・土鍋等の土器類と、曲物片・櫛片・斎串等の木製品類が検出された。なかでも井戸底から出土した、墨書きのある土器質の皿は、民俗学上興味深いものである。時期は、黒色土器からみて、平安時代中頃に比定できる。

12弥生時代～古墳時代の遺構（図版第15）

住居址6基が確認されている。8号住居址（KH₃）は南北6m、東西5mのほぼ方形を呈するが、南東隅は井戸の掘り方と切り合っている。4柱穴構造をもち、柱穴は径1.5～2.0m、深さ0.85～0.4mを測る。また、北壁立ち上り部は、0.22mの高さを有する。中央に径0.5m、深さ0.15mの焼土壙を検出し、炉址である可能性が強い。住居址の北西隅および西側中央に、それぞれ2本の溝を有する土壙があり、何らかの構造物の存在が考えられる。すなわち北西隅のそれは、幅0.2m、長さ1.2m、深さ0.11mの東西方向の溝と、幅0.2m、長さ0.5m、深さ0.1mの溝で、1.9m×1.4mの床面積を区画し、中に0.8m×0.6mの楕円形土壙を深さ0.25mまで穿っている。土壙内には若干の土器片以外、遺物は検出されなかった。西側のそれは、幅0.2m、長さ1.0m、深さ0.12mの南溝を北溝によって、1.0m×1.6mの床面積を区画し、同じく中に0.8m×0.5mの楕円形土壙を深さ0.3mまで穿っている。土壙内から壺の口縁部と高杯が検出された。両土壙とも、焼土の痕跡等は認められなかった。しかしながら、その形状・大きさからいって、土壙蓋とするのも納得がいかず、貯蔵穴と理解するのが妥当と考える。土層を観察すると、土層底部には、暗灰色土層が堆積し、上層には住居址廃絶時の土砂と同一の暗灰色土層が堆積していた。またこの住居址は、建て替えの痕跡が認められず、これらの遺構が同時存在したことは、まず認めてよい。

つぎにこれらの2溝1対の溝をどう考えるかであるが、おそらく剖板を立て並べて、一定の壁面を構成するものと理解する。すると、それらの壁面は、貯蔵穴を内包する空間をつくりだすとともに、竪穴内の間仕切りを果すことになり、住居内の空間構成を考えるうえで興味深い。北西隅の貯蔵穴を有する空間は、貯蔵穴の範囲を除いても、なお床面積2坪を有し、一定の面積を限って、土器を立て並べておいたことも充分考えられる。そうすると、竪穴内の傍に置いておくとの比べ、破損する割合が極めて少なく、合理的である。また、貯蔵穴を2カ所に分けて設けたのは、用途別に使用したとも考えられる。一方これらを省いたその他の空間についてみると、柱穴および柱穴に規制されるデッドスペースを除いても、北側に3m×1.2m、西側に3.4m×1.2m、東側に2.2m×1.2m、南側に2.4m×1.4m、中央炉付近に3.2m×2.4mの床面がみいだされる。このうち、南側については、そのやや東よりに排水溝と思われる溝が検出されたことから、出入口と考えられる。また中央部については、炉を中心と暖をとる空間と考えられるので、これら以外の3カ所を、人が寝起きする空間としてとらえることができる。北側では東西方向に、西側および東側では、南北方向に身体を伸展しても、幅1.2mを有するところから、大人2人が寝起きするのも可能と考える。とくに西側などは、小柄な人間（子供等）なら、縦列に寝場所をとることも不可能ではない。そうすると、1つの竪穴で、大人なら6人、子供を含めれば最大8人が寝食を共にすること

ができる。しかしこれは可能性の問題であり、実際には狭く感じられ、子供を含めた5～6人が適度と思われる。時期的には、庄内式期～布留式期と考えられる。

7号・8号・9号住居址は、いずれも後世の削平がはなはだしく、また調査区域外に位置することなど、検出状況は極めて劣悪である。7号住居址は、1辺4m弱、8号住居址は1辺4.8m、9号住居址は1辺3.8m前後で、いずれも方形プランを呈する。なお、8号住居址は中央に炉址が検出され、9号住居址は建て替えが認められる。また9号住居址の南東部1.5mの所に、撲土壙が検出されたが、他に対応する遺構が考えられず、屋外炉と思われる。遺物はいずれも土器細片で、時期は決定し難いものの、3号住居址等と相前後するものと考えられる。

その他の遺構として、調査区の南側から1.7m×0.7mの楕円形プランをもつ土壙墓が検出された。深さは0.3mで、遺物は検出されず、時期は不詳である。その他、数カ所に土壙・落ち込みおよび多数の柱穴が検出された。

(1) 遺 物 (図版第40～44)

(1)弥生時代の遺物

包含層から、畿内第Ⅴ様式に属する土器片が出土しているだけである。

(2)古墳時代の遺物

3号住居址の貯蔵穴1および床面から、布留式併行と考えられる高杯、袋口縁等が検出された。その他、包含層から埴輪底部片や壺が出土している。

(3)平安時代の遺物 (図版第40～44)

この時期の遺物としては、土器類と木製品類がある。

土器類は、井戸・柱穴・包含層から検出されている。

井戸は、特に下層から良好な一括資料が検出されている。内訳は、墨書き有する土器器皿2点、黒色土器A(完形に復するもの6点・底部片2点・破片14点)、燈明皿71点、羽釜7点、土釜8点、綠釉陶器5点(底部4点・口縁部1点)、猿投窓系統の灰釉陶器6～7点、把手付鍋の把手部1点、平瓦4点、その他須恵器片多數である。2点の墨書き土器(図版第40-6・7)は、下層といつてもほとんど底に近いところから、同一箇所で検出され、どちらもほぼ完形に近い。うち1点は、径14cm、高さ2.5cmを測る。底部内面に5行の墨書きがあり、それぞれ左から「中央(火)土公水神王」「西方土公水神王」「東方土公水神王」「南方土公水神王」「北方土公水神王」とよめる。なお「南方云々」の行は、他の行とは逆方向に書かれている。そして口縁部内面に「封」の文字を横に12ならべて書き、それらの文字の上に1条の墨書き線をひいている。他の1点は、径14cm、高さ2.7cmを測り、先のものとはほぼ同一の法量を示す。墨書きは内面に9文字みとめられ、底面中央から口縁部にかけて、大きく「天座大神王」、これと直角方向へ同じく底面から口縁部へかけて「十二神王」と書かれている。

これらの墨書き土器が果してどういう意味合いをもつかであるが、藤沢一夫氏によると、井戸を新しく構築した際に、水に住む神を祀ってその怒りを鎮め、井戸の水が枯れないように祈念する祭祀に用いられたものとされ、陰陽五行説から導かれるものとされている。そして具体的には、2つの眼を合口にして紐で結え、土器の中に「天座神」「水神王」などの神々を封じ込め、井戸に沈め

たものと考えられている。

ただ、なぜ「南方土口水神王」が他と逆方向に記されているのか、よく解らない。単純に逆から書いたとは考えがたいが、この井戸が住居（群）の南側に位置したために意識的にそうしたのか、これを使用した人々の意識の中に「南方土公水神王」に対する特別の考え方があったためにそう記したのか、全く不明である。いずれにしても、当時の人々の生活意識の中に、神々の存在が生き生きと映しだされるものである。因みに「土公神」とは、土を掌る神で、春はカマドに、夏は門に、秋は井戸に、冬は庭にあって、その場所を動かせばたたりがあるという。

さて、黒色土器B類のうち底裏に「中」の範刻の字を有するものが1点（図版第42a）ある。また縁輪陶器の底部のうら3点は、糸切り底に高台を付したもので、須恵器の底部にも糸切り底が認められるものがある。土器類以外に、土鐘が1点出土している。長さは3.0cm、中位径1.1cm、端部計0.6cmをはかる。中央に径3mmの孔を穿っている。

上層から検出された土器類には、黒色土器A2点、B8点、瓦器1点、燈明皿7点、羽釜1点、土釜2点、駿投繩系統の灰釉陶器3点の他、後世の流入と考えられる土器片が若干ある。ただ上記の他に、黒色土器Bの手法・形態を有しながら、いぶされていないと思われる灰褐色系統の土器片が14点検出されており注意をひく。今後検討されねばならない課題である。

木製品類は下層から検出されており、曲物・櫛・斎串・棒状の一端が黒焦げた木片等がある。曲物は、完形に復するものではなく、底板と側板が木釘で打ちとめられている。底径17cm～27cmまで数種類がみられ、破片で數十点ある。櫛はフグ製と考えられ、全て横構で実用的なものである。これも完形に復するものではなく、形態的には、端部が直角に屈曲するものと、丸味をもって曲がるものがある。幅は12mm位と考えられ、長さは4cm前後のものが多い。破片数で20を数える。これらの櫛は、この時期の井戸にはしばしば発見されるものであり、先の黒書土器とともに、井戸の祭祀に何らかの関連をもつものと思われ、興味深い。斎串は、幅1.2cm、長さ17.1cmで、先端が尖っている。また自然遺物としては、マツカサやモモの種・ドングリ・ヒョウタンの実等が検出されている。（森田）

II. 氷室塚古墳

13. 氷室塚古墳の調査

高槻市氷室町二丁目571-8にあたり、小字名は塚後と称する。現状は宅地である。氷室塚古墳は、今城塚古墳の南西約100mに位置し、かなり以前から今城塚古墳の陪塚として知られていた。しかし、早くから市街化されたため、周濠および墳丘規模等についても、まったく不明のままである。このたび、古墳の東側の濠と推測される所において、個人住宅を改築する目的で、土木工事等に伴う発掘届が提出されたため、文化庁・府教委等関係者とも協議のうえ、発掘調査を実施した。

調査は、調査地が周濠の跡と考えられる池であることもあって、中央部に東西2m、南北3mのトレチアを設け、重機で池底まで掘り下げた。層序は盛土（1.6m）、黒色砂質土層（0.4m）、黄灰褐色粘土層〔地山〕である。黒色砂質土層は池底の堆積土と考えられるが、埴輪類の遺物はまったく含まれていなかった。（大船）

14. 氷室塚古墳の調査

高槻市氷室町二丁目91-1～8番地にあたり、小字名は塚後と称する。現状は宅地である。このたび、氷室塚古墳の南東裾部において、個人住宅を改築する目的で、土木工事等に伴う発掘届が提出されたため、文化庁・府教委関係者とも協議のうえ、発掘調査を実施した。

調査は調査地中央部の南と北側に、3m角のトレンチ2ヶ所を設け、重機で耕土まで掘り下げ、その後人力で遺構の検出にかかった。層序は盛土(0.7m)、耕土(0.2m)茶褐色粘質土層〔地山〕である。

耕土下においては、床土さえもなく、すぐに地山面に達するため、遺構・遺物を検出することができなかった。以前におこなった北側の周濠推定地とは、距離にして約20mであったが、地山のレベルは約1mの差があり、一巡していないことから、南向きの前方後円墳であった可能性が考えられる。(大船)

II. 宮田遺跡

15. 宮田遺跡の調査

高槻市宮田町三丁目87-1番地にあたり、小字名は諫木と称する。現状は宅地である。宮田遺跡の南側に位置し、春日神社から南方200mにあたる。このたび、個人住宅を新築する目的で、土木工事等に伴う発掘届が提出されたため、文化庁・府教委とも協議のうえ、発掘調査を実施した。



挿図2 氷室塚古墳の調査位置図

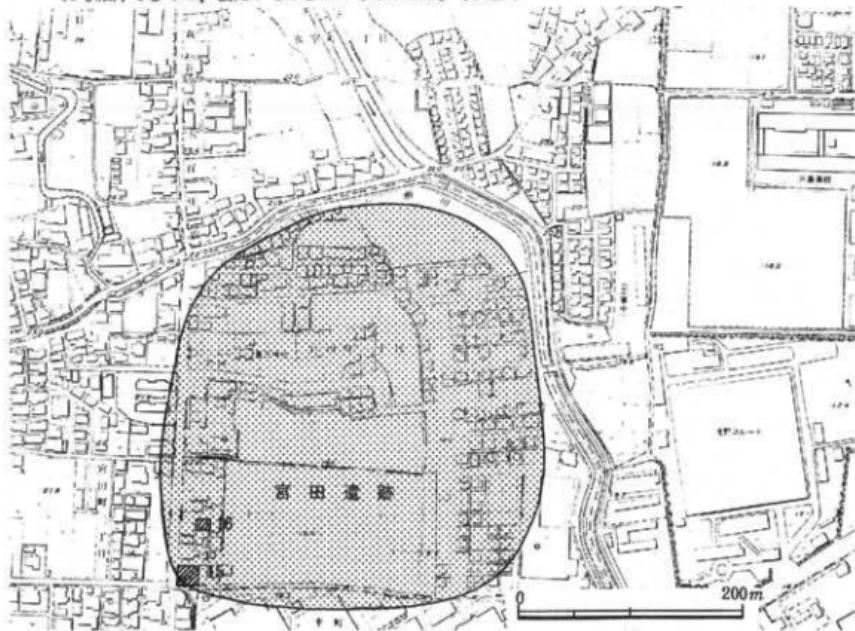
調査は中央部南寄りに2m角のトレンチを設けて実施した。層序は盛土(0.7m)、耕土(0.15m)、床土(0.1m)、黄褐色砂層〔地山〕となり、遺構・遺物はまったく検出することができなかった。地山面の高さは標高19.8mを測る。(大船)

16. 宮田遺跡の調査

高槻市宮田町三丁目1-8番地にあたり、小字名は鎌木と称する。現状は宅地である。このたび、個人住宅を改築する目的で、土木工事等に伴う発掘届が提出されたため、文化庁・府教委等関係者とも協議のうえ、発掘調査を実施した。

調査は調査地の東西2ヶ所に、それぞれ2m角のトレンチを設け、遺構・遺物の確認をおこなった。西トレンチの層序は、盛土(0.3m)、暗灰褐色砂質粘土層(0.4m)〔包含層〕、黄灰色粘土層〔地山〕となり、東トレンチの層序は、耕土(0.3m)、黄色粘土層(0.08m)〔床土〕、暗灰色砂質土層(0.4m)〔包含層〕、黄灰色粘土層〔地山〕となる。地山の高さは標高20.1mを測る。

遺構は、両トレンチともまったく認められず、整地層と考えられる包含層から、中世の土器片がわずか10数点出土したのみである。西トレンチから出土した遺物は、磁器片1、瓦器腕片数点、土師器皿片数点であり、東トレンチから出土した遺物は、土師器甕1点、土師器皿数点である。いずれも細片であって、復元することができなかった。(大船)



挿図3 宮田遺跡の調査位置図

IV. 富田遺跡

17. 富田遺跡の調査

高槻市富田町四丁目2527番地にあたり、小字名は西ノ口と称する。現状は宅地である。旧富田小学校跡地一帯に分布する富田遺跡は、小学校跡地に高槻市が公営住宅の建設を予定した際、跡地が普門寺の旧境内地であったことから、昭和51年8月、寺跡の遺構確認を目的に発掘調査を実施し、発見したものである。遺構は弥生時代後期から江戸時代に至るさまざまなものが、調査地全域から検出され、南側一帯にも拡がっていることが十分考えられた。

このたび、小学校跡地南方20mのところにおいて、個人住宅を改築する目的で、土木工事等に伴う発掘届が提出されたため、文化庁・府教委等関係者とも協議のうえ、発掘調査を実施した。

調査は建物基礎と残土の関係から、調査地の東西に2m×2mのトレンチを2ヶ所設け、人力でかこなった。層序は表土(0.1m)、褐色土層(0.1m)[包含層]、黄赤色粘土層[地山]である。地山面の高さは標高13.8mを測る。

検出した遺構は、西トレンチでは幅1.0m、深さ0.25mの東西溝と径0.15~0.4m、深さ0.1mの柱穴3個があり、東トレンチでは径0.25~0.5m、深さ0.1~0.3mの柱穴2個と浅い落ち込み1ヶ所がある。

出土遺物は、包含層から瓦器・土師器・須恵器・陶器・瓦の細片が若干出土した他、各遺構からも同じ種類の遺物が少量出土している。これら出土遺物の多くは、碗・皿・壺類の日用雑器であるが、その他に東西溝出土の鉄釘2点と包含層出土の須恵質上鍵1点がある。出土遺物の時期は、中世のものを中心にして、江戸時代初期のものが若干含まれている。(大船)

18. 富田遺跡の調査

高槻市富田町六丁目2767番にあたり、小字名は西垣内町と称する。現状は宅地である。富田遺跡の南側に位置し、普門寺から南西方約150mのところである。このたび、個人住宅を改築する目的で、土木工事等に伴う発掘届が提出されたため、文化庁・府教委等関係者とも協議のうえ、発掘調査を実施した。

調査は中央部に南北2m、東西4mのトレンチを設け、重機を使用して表土を掘り下げた。層序は表土(0.1m)で、包含層などではなくその下はすぐ黃褐色粘土層[地山]になる。地山面の高さは標高13.9mを測る。

検出した遺構は、径0.1~0.6m、深さ0.1~0.35mの大小の柱穴10数個と幅0.3m、深さ0.1m、長さ3mの東西溝1条がある。遺構の埋土は、黄茶褐色~暗褐色土層で、少量の上器片が出土した。出土遺物から見て、弥生時代後期から平安時代までの柱穴が重複していると考えられるが、それぞれの関連性については明確にし得なかった。

出土遺物は柱穴・溝の埋土からのものであって、小さな土器片が大部分である。弥生時代後期に属する遺物は、他の時代のものに比べて多く出土しており、タキ目を有する壺腹片・壺底部・壺口縁部片がある。古墳時代の遺物は、比較的大きな柱穴から6世紀後半の須恵器片が数点出土している。また、奈良時代の須恵器片も、同じ大きな柱穴から出土する。平安時代の遺物としては、

黒色土器細片が2点程ある。表土層からは備前焼のスリ鉢片が出土したが、この時期に属する遺物は他に見られない。

今回の調査の結果、富田遺跡の南限について、新たな知見を得た。すなわち、これまで考えられていた範囲がより南側へ拡がり、台地南端部にまで及ぶことが明らかとなった。（大船）

V. 大藏司遺跡

19. 大藏司遺跡の調査

高槻市大藏司2丁目202番地にあたり、小字名は二反田と称する。現状は水田である。このたび住宅建設の目的で、土木工事等に伴う発掘届が提出されたため、文化庁・府教委等関係者とも協議のうえ発掘調査を実施した。

大藏司遺跡は、史跡・鶴上郡衙跡の北方約1kmのところにあり、芥川と真如寺川の間の微高地に立地している。この付近は以前から、道路建設や水源池建設などで若干の土器類が検出されていて、何らかの遺構が存在するものと考えられていた。しかし、近年まで、本格的な発掘調査は行われず、その実体は不明であった。ところが、昭和53年4月、市道沿いで、発掘調査を実施したところ、弥生時代～奈良時代に及ぶ集落遺跡が検出された。当該地はさきの調査区の北約150mに位置し、遺跡の拡がりと遺構の状況を把握するため、調査をおこなった。



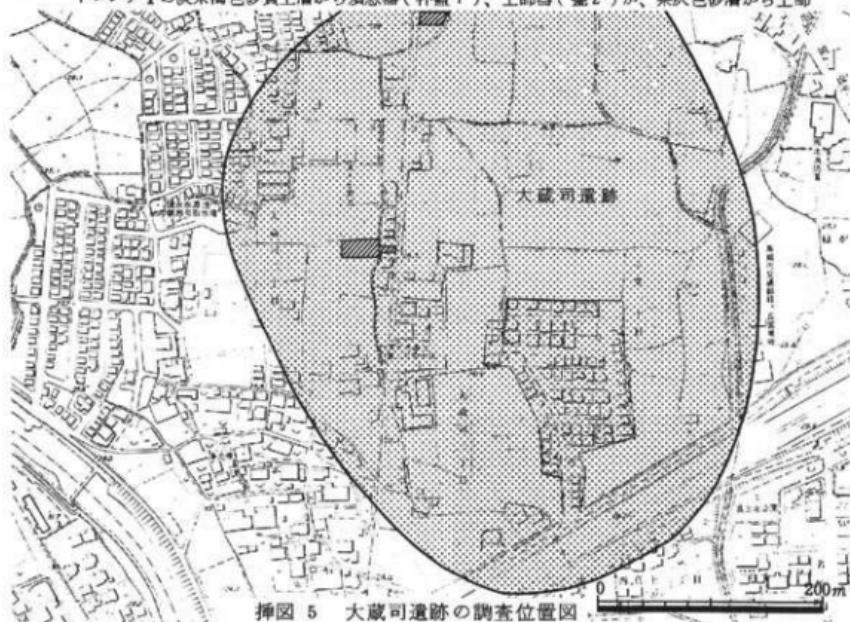
挿図4 富田遺跡の調査位置図

(A) 遺構(図版第45・46・91・92)

調査は、すでに盛土整地がなされていたため、2ヶ所のトレンチを設定し、重機を使用しておこなった(図版第91)。トレンチI($2.5\text{m} \times 8\text{m}$)の調査では、古墳時代の包含層と中世の堅穴状の落ち込みを検出した。落ち込みは、床土下で検出され、水田造成時に中世の遺構面は削平されている。古墳時代の包含層は、旧地表下 0.4m にあり、厚さ $0.3\sim 0.4\text{m}$ を有する良好なものであるが、遺物の包含層はさほど顯著でない。この包含層下では、若干の土器を含む茶灰色砂層の厚い堆積を認めた。トレンチII($1.5\text{m} \times 17\text{m}$ 、一部拡張)は、トレンチIの北 10m のところに設けた。このトレンチでは古墳時代の包含層は認められず、中世包含層直下で、旧河道を検出している。中世関係では、溝1条と石積み井戸1基を検出している。溝は、幅 0.3m 、深さ 0.1m を測り、南北方向の走行を示している。井戸は、トレンチのやや西寄りで検出されており、上辺は、前記の如く、水田造成時に削平されている。現存する法量は、掘り方径 1.7m 、上端内径 1.2m 、底径 0.65m 、深さ 1.8m を測る。石積みは、人頭大ないしそれより一まわり大きい河原石を用い、平積みにして築かれている。築き方としては、あまり巧みとは云えず、上層の水田造成以前に、石積みの北側が崩れ落ちたとみて、井戸底から石が数点検出されている。また一部の石材についても、ずれ込んだ様子がうかがえた(図版第92の網点部)。時期は出土遺物からみて、13世紀頃と考えられる。

(B) 遺物(図版第46・47)

トレンチIの淡茶褐色砂質土層から須恵器(杯蓋!)、土師器(壺2)が、茶灰色砂層から土師



挿図5 大藏司遺跡の調査位置図

器（杯8）が出土している。杯蓋1は天井部の回転ヘラ削りが、口縁部近くまで及んでおり、稜は明瞭である。色調は灰白色。時期は5世紀末。蓋2は丸底で、やや長胴形の体部に上方へ短く立ちあがる口縁部を有する。外面は刷毛調整。内面の刷毛調整は粗く、粘土の継目が看取できる。胎土は砂粒を多く含む。色調は茶褐色。杯3は、中央がやや凹んだ平底の底部に、斜め上方へひろがる体部を有する。口縁部は内彎気味に薄くおわる。底部は厚く0.8cmを測り、鈍重な感じがする。内外面ともナデ調整。胎土は精良。色調は褐色。また、茶灰色砂礫層から、布留式の纏片が出土している。その他、同層から高杯脚部片も検出している。つぎに、トレンチⅡの茶灰色砂礫層から出土した須恵器（杯蓋4）、（杯身5・6）、高杯（7）、土師器（壺8）についてみていくことにする。杯蓋4は天井部の形状、回転ヘラ削り、及び稜の鋭さからみて、先の杯蓋1と同様5世紀後半のものであろう。杯身5・6もそれらと組み合う時期のものである。高杯7は無蓋のもので、杯部に一条の櫛描波状文を施している。脚部は低く一段の方形透穴がある。杯蓋と同時期であろう。壺8は口縁部を欠いている。底部は平坦面をもち、体部は球形を呈す。内外面とも刷毛調整。胎土は砂粒を多く含み、淡灰褐色である。その他、灰褐色土層から東播磨の須恵器（片口鉢）が出土している。壺部は平坦面をもち、12世紀頃のものであろう。また、井戸から13世紀に比定できる瓦器碗や土師皿が出土している。（森田）

20. 大藏司遺跡の調査

高槻市宮ノ川原4丁目564-6あたり、小字名は重前寺と称する。このたび個人住宅兼分譲住宅建設の目的で、土木工事等に伴う発掘届が提出されたため、文化庁・府教委等関係者とも協議のうえ、発掘調査を実施した。当該地は大藏司遺跡と宮ノ川原遺跡の中間に位置し、今回遺跡の拡がりを確認すべく、調査をおこなった。トレンチは5.5m×2.5mを設定し、重機で包含層を確認すべく掘り下げた。層序は盛土（0.9m）、旧耕土（0.2m）、灰褐色砂礫層（0.08m）、淡茶灰色砂礫層（0.2m）、褐色粘質土層（0.1m）、緑灰色粘質土層（0.5m）、緑青灰色砂層（0.2m）、綠灰色粘土層（0.4m）、綠青灰色砂礫層（0.4m）、青灰色粘質土層（グライ層）となり、遺物包含層や、造構面を形成するような土層はみられず、砂礫層や粘質土層の互層である。以上のことから、本調査区およびその周辺については、遺跡の拡がりは考えられず、無遺跡地帯と思われる。しかし、当該地の東50mで、弥生時代の方形周溝墓が、また西南100mのところでは、古墳時代の包含層が確認されており、周辺についても、今後確認調査を充実させていきたい。（森田）

IV. 塚脇古墳群

21. 塚脇8号墳の調査

高槻市塚脇一丁目2309番地にあたり、小字名は蕨塚と称する。塚脇の中心部に位置する唯徳寺のすぐ東側には、塚脇8号墳（円墳）〔迷塚〕、塚脇9号墳（方墳）〔蕨塚〕、塚脇10号墳（方墳）〔御女塚〕の横穴式石室を主体部とする3基の後期古墳が一群を形成していた。しかし、方墳である9・10号墳はすでに消滅しており、円墳である8号墳のみが残されている。

このたび、8号墳と北側で接する唯徳寺境内において、個人住宅を改築する目的で、土木工事等に伴う発掘届が提出されたため、文化庁・府教委等関係者とも協議のうえ、発掘調査を実施した。

調査は8号墳と接する調査地の東南隅に周濠を確認するためのトレンチを設けておこなった。層序は、表土下0.1mで黄褐色礫土層〔地山〕となり、遺構・遺物はまったく検出されず、調査地まで古墳の範囲が拡がっていないことが確認された。8号墳の規模は直径14m、高さ2.5mと推測される。地山面の高さは標高44.6mを測る。(大船)

VII. 天神山遺跡

22. 天神山遺跡の調査

高槻市天神町1丁目10-86番地にあたり、小字名は天神山と称する。現状は、山林であるが、分譲住宅建設の目的で、土木工事等に伴う発掘届が提出されたため、文化庁・府教委等関係者とも協議のうえ、発掘調査を実施した。

当該地は、天神山丘陵の東支脈の南寄りに位置し、北山天満宮の一部とその斜面にあたる。調査は、斜面部にトレンチI(3m×4m)を、そして、丘陵頂部にトレンチII(2m×2m)を設定しておこなった。トレンチIを設けたところは、かつて造成がおこなわれたらしく、斜面の一部がヒナ段状を呈していた。調査の結果、旧斜面の一部を検出したのみで、遺構・遺物・包含層は認められなかった。トレンチIIの調査では、表土の腐蝕土層を除去すると、黄褐色粘土層の地山があらわれ、遺構は検出されなかつた。ただ弥生時代中期(畿内第III~IV様式期)の壺の破片が若干出土している。土器片のうち数点は河内産の壺片である。

天神山遺跡の東丘陵一帯はこれまでの調査で、昭和53年10月に星神車塚古墳下層から弥生時代中期の方形周溝墓(畿内第II様式期)と土壙墓(畿内第IV様式期)を、また昭和54年5月には天満宮境内から、同じく中期の方形周溝墓(畿内第II様式期)を検出しており、中期の墓域であることが明らかになっている。今回の調査地点においても、遺物の出土状況からみて、近くの尾根上に周溝墓があったものと考えられる。(森田)

VIII. 古曾部南遺跡

23. 古曾部南遺跡の調査(図版第48・49・50・93・94)

高槻市古曾部2丁目170番地にあたり、小字名は樋ノ口、奈良ノ本と称する。現状は水田であるが、駐車場造成の目的で、土木工事等に伴う発掘届が提出されたため、文化庁・府教委等関係者とも協議のうえ、発掘調査を実施した。当該地は、以前から、須恵器片の散布地として知られ、また、遺跡の西300mには、6世紀後半の前方後円墳である星神車塚古墳を擁するところから、まず、予定地全域にわたって遺構の確認調査をおこなった。調査は、4m×5mのトレンチを8ヶ所設け、順次実施した。

トレンチI

層序は図に示した通り、現水田の床土下0.7mの間は、砂層ないし、砂質土層の細かな堆積層が

みられ、遺跡立地に適さない不安定な状況を示している。しかし、その下層の暗灰色土層ないし、暗灰色粘質土層は、遺物を包含し、土層の状態をみても、比較的安定していたものと思われる。遺構としては、最下層で、幅1.6m内外の南北方向の溝が2本検出されている。遺物は、暗灰色粘質土層から赤生式土器（前期？）、土師器（布留式併行）、杭（長さ1.15m）、用途不明の木材などが検出され、暗灰色土層から須恵器、用途不明の木材などが検出されている。土師器（壺）は、体部下半を欠失しているものの、その形態からおおよその時期がうかがえる。体部外面は、風化が激しく調整不明である。内面はヘラ削りの後、ナメ調整し、口縁部はヨコナメ調整している。色調は暗灰褐色を呈し、永らく水没していたような風化状況を示している。杯蓋（？）2は、図示したように接合資料である。天井部は全面にわたって、回転ヘラ削りがなされ、中央部につまみがつく。口縁部は、ややふくらみをもち、端部に浅い凹線がある。天井部と口縁部の境には稜があり、稜の下に凹線がめぐり、上には段状の凹みがある。内面の調整は非常に丁寧である。その他、杯身14、高杯3・瓶15などの破片を検出している。須恵器はいずれも5世紀後半に比定できる。

トレンチⅡ

地表下1.5mまで掘り下げて調査した。トレンチⅠで検出した暗灰色土層を認めたが、遺物は出土しなかった。また地表下約0.7mのところで、小溝を検出したが、遺物ではなく、中世以降のものと思われる。

トレンチⅢ

地表下2mまで掘り下げて調査した。暗灰色土層下の暗青灰色砂質土層上で、庄内式～布留式古柏にかけての土器片を検出したが、遺構はみられなかった。トレンチⅠでも認められた灰色土層を切り込んだ溝が検出された。溝内から須恵器（杯蓋・杯身・器台・壺）の破片が出土している。時期としては6世紀初頭～7世紀前半のものである。その他、7世紀後半頃の高台の付いた杯も出土している。

トレンチⅣ

地表下2mまで掘り下げて調査した。暗灰色土層下に地山と考えられる緑青灰色砂礫層を検出した。暗灰色土層から、脚部を失っている高杯9を検出した。杯部中位に把手がつくもので、内面全体に自然釉がかかっている。5世紀後半のものである。また上層の青灰色砂層からは須恵器（杯・壺）や土師皿などが検出されている。壺は陶邑産と考えられるもので、縱方向のヘラあたりがある。

トレンチⅤ

3mほど掘り下げるも、灰色ないし青灰色の砂層および粘土層の互層であり、遺構・遺物は検出されなかった。

トレンチⅥ

地表下2mまで掘り下げて調査した。上層部で、東側に傾斜する自然の落ち込みを検出したのみで遺構は検出されなかった。遺物としては、高杯・壺などの若干の須恵器片のみである。5世紀末～6世紀初頭のものであろう。

トレンチⅦ

地表下2.5mまで掘り下げて調査したが、青灰色の砂層と粘土層の互層で、遺構・遺物は検出され

なかつた。

トレンチⅣ

地表下2mまで掘り下げ調査したが、青灰色の砂層と淡褐色系の砂層との整合な互層である。遺構は検出されなかつた。なお青灰色砂層から、堆18が1点出土している。

以上、各トレンチの調査を概観してきた。今回の試掘調査によって、古曾部南遺跡の南端がほぼ定まつたと考えられる。すなわち、暗灰色土層の括がりがみとめられたトレンチⅣ以北が遺跡の範囲となろう。そして、この上層からは、5世紀後半の須恵器が目立つて出土しており、時期についてもある程度限定して考えられるようである。なお、トレンチⅢで検出した古式上部器に関連する遺構は、いま少し西側にあるようである。また、暗灰色土層より上層の各層については、2次堆積と考えられ、そこから出土した各時代の遺物については、当該区より以北にあつた遺跡地からの流出品であろう。(森田)

IX. 安満遺跡

24. 安満遺跡の調査

高根市八丁畠町に所在する安満遺跡は、昭和43年、京大農場東側での宅地造成工事に先立つ発掘調査で、弥生時代前期の集落をめぐる2条の溝を発見し、その中心部が想定できることとなつた。これ以後、数次の範囲確認調査を実施、京大農場を含む範囲に弥生時代の集落が存在することが明らかとなつた。一方、櫛尾川に近い高根町周辺は、遺構の希薄なこともあって、開発が進むこととなり、これまで、順次調査を実施してきた。その結果、弥生時代から中世に至る遺構・遺物を検出し、一部については調査報告書等で報告している。

今年度の調査結果を含めて、それ以後の成果について概要を報告したい。

ここで報告する調査地は挿図5に示したとおり、高根町に位置し、昭和52年以後の調査である。I~V区までの内、I区とVA区については、すでに報告済みのもので、以下各区毎に概略を記す。

1. II区の調査

(A) 遺構 (古版第51・95)

基本的な層序は、耕土(0.1~0.2m)、床土(0.05~0.1m)、黄灰色土層〔地山〕である。遺構はII A区の南部分とII C区の東部分で建物跡や土壙墓などを検出した。II B区は砂礫まじりの褐色土や灰褐色土が複雑に堆積した土層で、遺構はまったく発見されなかつた。

II A区では建物跡と土壙墓、井戸を検出している。建物1は、柱通りがほぼ南北にあって、西側に庇がつく。規模は南北3間(柱間2.2m)×東西1間(柱間2.0m)以上である。建物2は南北2間(柱間2.3m)×東西1間(柱間2.0m)で、建物1と重複するが、22°東へ振っている。建物3は建物1と約7m隔たつた北側に位置し、東西2間(柱間2.0m)×南北2間(柱間2.0m)で、約8°西に振る。建物4は、建物3とはほぼ同一方向で重複し、東西2間(柱間1.7m)×南北1間(柱間1.9m)の規模である。また、井戸と土壙墓は建物1と2の西側で検出した。土壙墓1は長さ1.1m、幅0.9m、深さ0.8mを測り、墓壙内から骨片が出土している。井戸1は直径0.75m、深さ1.4mを測り、下部に曲物をすえ、その上に石組みしたものである。建物3の西側にも素掘りの井戸2を検出している。規模は直径1.2m、深さ0.9mである。土壙墓2は建物3の東北側にあって、長

さ 1.1m 、幅 0.6m 、深さ 0.1m で、形状は長方形を呈する。

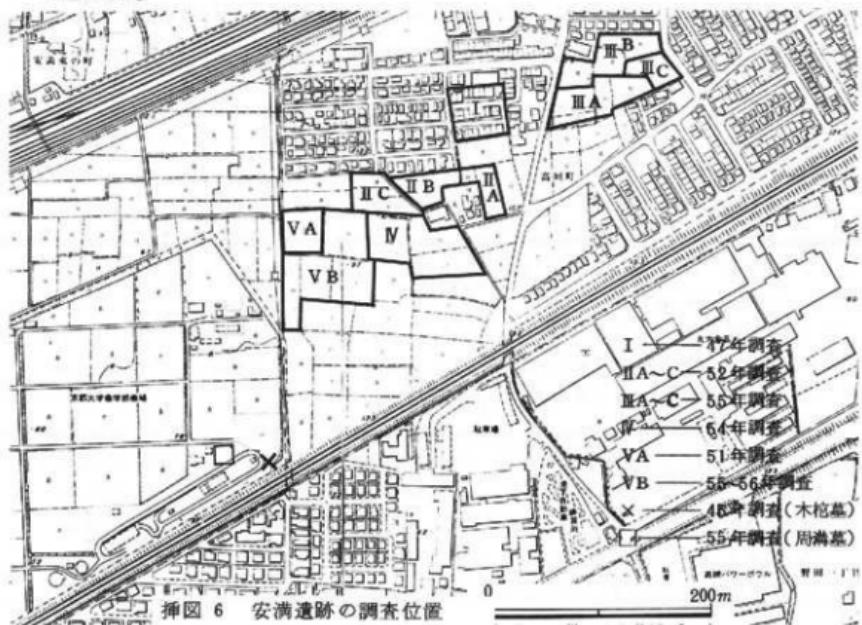
II C区では建物跡と土壙墓を検出した。建物5は東西2間(柱間 2.2m)×南北1間(柱間 2.0m)である。土壙墓3は不定形なもので、長さ 2.2m 、幅 1.1m 、深さ 0.6m を測る。土壙墓4は直径 1.5m 、深さ 0.5m の楕円形である。土壙5は長さ 1.6m 、幅 0.65m 、深さ 0.1m を測る。形状は長方形を呈する。この区は、これら遺構の西側には、まったく遺構らしきものを認められなかつたため、II C区の東端からII B区にかけて建物群が残がっていると考えられる。

(B) 遺 物 (図版58・61)

数は少ないが、中国製磁器・綠釉陶器、瓦器、土師器等が出土している。

土壙墓2から出土した土師器皿(図版第58-1)は口縁が屈曲し、底部を穿孔するものでII C末頃のものである。井戸1出土の土師器皿(図版第58-2)、厚手で屈曲の具合も強くII C中頃のものであろう。柱穴からは受け皿状の上部に高台の付く土師器皿(図版第58-3)と中国製白磁皿(図版第61b-5)が出土している。白磁皿はⅣ-1-b類に分類され、内面に花文が描かれており、12C代のものであろう。

他に、包含層から中国製白磁碗(Ⅶ類)や四耳壺片、綠釉陶器が出土している。綠釉陶器はいずれも軟質の焼で、蛇の目高台と輪高台がある。後者は底部を糸切りし、高台端部の内側に段がみられる。いわゆる滋賀県産のものである。その他、丹波焼の攝鉢(図版第61a-1)や唐津焼の碗などがある。



挿図6 安満遺跡の調査位置

2. 地区の調査

(A) 遺構 (図版第52b・53~55・97)

全体的な層序は、耕土 ($0.1 \sim 0.2 m$)、床上 ($0.1 \sim 0.2 m$)、暗褐色土 ($0.2 \sim 0.4 m$)、黄灰色砂質粘土〔地山〕である。地形的にはB区の南からA区の中央にかけて谷底となる。

(1) 古墳時代の遺構

古墳時代の遺構としては3基の井戸状土壙をA区から検出している。土壙1は直径 $1.5 m$ 、土壙2・3は直径 $1 m$ を測り、いずれも深さ $0.6 \sim 0.7 m$ である。土壙からは布留式期の壺・甕・高杯・小形丸底壺が出土している。

(2) 奈良時代の遺構

奈良時代の遺構としては、A区の西と東で、B区の北で掘立柱建物跡や井戸・土壙墓を検出している。A区の西で検出した遺物1・2は、柱通りが約 12° 東へ振っている。建物1は東西5間 (柱間 $1.65 m$) ×南北3間 (柱間 $1.6 m$) で、建物2は東西1間 (柱間 $1.6 m$) ×南北2間 (柱間 $1.6 m$) である。建物2は建物1のすぐ西南にあって、多少ひりがあるが、庇をもつものと思われる。井戸1は3段に重ねた曲物で、建物1の南に位置する。直径 $0.8 m$ 、深さ $0.75 m$ を測る。土壙墓1は建物1の東で検出した。長さ $1.9 m$ 、幅 $0.9 m$ 、深さ $0.6 m$ の小判形を呈している。さらに、建物1の北側には、約 6° 東に振る柱列がある。柱の間隔は不揃いであるが、L字状に続く構列と考えられる。

A区の東で検出した井戸2は直径約 $3 m$ 、深さ約 $1.6 m$ を測り、埋土から人頭大の塊石が数個出土しているところから、石で組みあげた井戸であろう。埋土中からの遺物は須恵器や土師器の墨書き器をはじめ、刀子状木製品が出土している。

B区の北側では3棟の掘立柱建物跡と骨壺がある。建物3は南北3間 (柱間 $1.4 m$) ×東西2間 (柱間 $1.9 m$) で、約 65° 東へ振る。建物4は建物3と同一方向にあって、東西2間 (柱間 $1.9 m$) ×南北1間 (柱間 $1.5 m$) である。建物5は東西2間 (柱間 $1.6 m$) ×南北1間 (柱間 $1.9 m$) 以上で、東住があるところから倉と考えられる。これらの内、建物3・5の柱穴は一辺約 $1.0 m$ の方形の掘り方をもったもので、他の柱穴に比べて立派である。一方、建物3の南西約 $5 m$ のところで正位置にある骨壺を検出した。骨はすでなく、掘り方や配石等の施設も確認できなかった。

(3) 平安時代以後の遺構

A区の東、B区の東、C区からは多数の柱穴と井戸・土壙墓を検出した。柱穴内から出土する遺物は瓦器が多数を占めるが、黑色土器 (A・B類) もあるところから、重複関係にある。また、建物跡として確認できるものはB区東部の地域のみである。

建物101~104は 5° 東へ振れる建物である。建物101は南北3間 (柱間 $2.0 m$) ×東西2間 (柱間 $1.5 m$)、建物102は東西2間 (柱間 $1.8 m$) ×南北2間 (柱間 $2.0 m$)、建物103は東西2間 (柱間 $1.4 m$) ×南北2間 (柱間 $1.3 m$)、建物104は東西2間 (柱間 $2.0 m$) ×南北1間以上である。建物105~107は 18° 東へ振る建物で、建物105は東西2間 (柱間 $4.0 m$) ×南北2間 (柱間 $1.5 m$)、建物106は東西2間 (柱間 $1.9 m$) ×南北2間 (柱間 $1.4 m$)、建物107は東西2間 (柱間 $1.9 m$) ×南北2間 (柱間 $2.0 m$) である。全体に小規模なものである。井戸は素掘り、石

組み・曲物の3種類がある。井戸101は直径2.2m、深さ1.7m、底の直径1.3mを測る円形のものである。元は石組井戸で、放棄後、瓦器羽釜を数個一括して投棄してあった。井戸102は石組みで、上面の直径1.5m、深さ1.4mを測る。井戸103は直径1.5m、深さ2.0m、底の直径0.9mを測る円形のもので、井戸枠はない。埋土から瓦器（挽・羽釜）、須恵器（鉢）が出土している。井戸104は円形・素掘りのもので、直径0.9m、深さ0.7mを測る。井戸105はA区東側にあって、直径2.2mの掘り方内に曲物をすえていた痕跡がある。埋土から黒色土器が出土している。井戸106は直径2.4m、深さ1.0mを測る円形のもので、元来、石組井戸である。井戸107は直径0.8mを測る円形・素掘りのものである。

土壙墓は殆んどが隅丸方形の小判形を呈している。埋土から出土する遺物は一部に黒色土器を検出するが、全体的には瓦器片が出土する。土壙墓101は長さ1.4m、深さ0.1mを測る。南北分は検出できなかった。土壙墓102は南北方向で長さ1.5m、幅1.2m、深さ0.1m、土壙墓103は東西方向で長さ1.0m、幅0.85m、深さ0.8m、土壙墓104は東西方向で長さ1.0m、幅0.8m、深さ0.25m、土壙墓105は東西方向で長さ0.85m、幅0.6m、深さ0.25m、土壙墓106は東西方向で、長さ0.8m、幅0.6m、深さ0.3m、土壙墓107は東西方向で長さ0.9m、幅0.6m、深さ0.25m、土壙墓108は東西方向で長さ1.5m、幅1.1m、深さ0.35m、土壙墓109は南北方向で長さ1.8m、幅0.55m、深さ0.35m、土壙墓110は長さ0.9m、幅0.6m、深さ0.4m、土壙墓111は東西方向で長さ0.95m、幅0.6m、深さ0.3m、土壙墓112は長さ1.4m、幅0.8m、深さ0.15mを測る。

土壙墓113～123はA区東部で重複しながら検出された。内部からは主として瓦器碗の破片が検出される。土壙墓113は長さ1.8m、幅1.3m、深さ0.8m、土壙墓114は長さ1.8m、幅1.0m、深さ0.15m、土壙墓115は長さ1.4m、幅0.9m、深さ0.2m、土壙墓116は長さ1.1m、幅0.85m、深さ0.2m、土壙墓117は土壙墓115の下部にあって幅0.7m、深さ0.1m、土壙墓118は土壙墓116の下部にあって幅0.5m、深さ0.1m、土壙墓119は土壙墓115・116の下部にあって幅1.0m、深さ0.2m、土壙墓120は長さ0.85m、幅0.75m、深さ0.1m、土壙墓121は土壙墓120の下部にあって幅0.65m、深さ0.15m、土壙墓122は長さ1.0m、幅0.9m、深さ0.3m、土壙墓123は長さ0.9m、幅0.6m、深さ0.2m、土壙墓124はC区の東部で、長さ1.7m、幅1.1m、深さ0.2m、土壙墓125は長さ1.15m、幅0.9m、深さ0.2m、土壙墓126は長さ1.2m、幅0.85m、深さ0.1m、土壙墓127は幅1.05m、深さ0.25m、土壙墓128は長さ1.25m、幅1.05m、深さ0.2m、土壙墓129・130は重複し、それぞれ幅0.5～0.7m、深さ0.2mを測る。その他、A区の東とC区の南で幅0.2～0.4m、深さ0.1～0.2mを測る。東西方向の溝と共に直交する数条の溝が検出されたが、いずれも中世以降のものである。

(B) 遺 物 (図版第58・59・60・62・64)

弥生時代から中世に至る各時代の遺物が出土しているが、特に良好な状態で出土しているのは奈良時代と中世のものである。

弥生時代の遺物としては第V様式後半の二重口縁の壺がある。壺高29cmで、最大腹径が下位にあり、外面にタタキ目がのこる。

古墳時代の遺物としては、Ⅲ A区土壙1～3から出土した布留式土器があるが、いずれも未整理

である。遺構に伴わないが、Ⅲ B 区から須恵器（壺・杯・台付壺の脚部）（図版第58-5・6・7）が、石製訪題車（図版第64 b - 2）が出土している。

奈良時代の遺物としては、主として井戸 2 の下層から出戻しているものがある。土師器には杯・皿・壺がある。杯（図版第58-8～11）は口径13～14cm、器高4～4.5cmで底部未調整のもの（a 手法）と底部のみヘラ削りするもの（b 手法）がある。皿（図版第59-1,2）は口径15～16cm、器高3～3.5cmで、杯同様外面をヘラ削りするものと未調整のものがある。後者は、内面に放射状の暗文を施す。壺（図版第59 b - 3,4）は口径15cm前後、器高12～13cmで外縁と口縁内面に刷毛調整を施す。須恵器には杯・蓋・高杯・鉢がある（図版第59-5～11）。杯は無高台のものと高台のつくものとがある。無高台の杯（5～7）は口径13～14cm、器高4cmを測り、灰色で硬質のものと灰白色で軟質のものがある。高台のつくものには口径10.5cm、器高4.5cmの小形のもの（8）と口径20cm、器高6.2cmの大形のもの（9）があり、両者とも暗青灰色で硬質である。蓋は口径15cmでしっかりした擬宝珠がつくもの（10）と扁平なものがある。高杯（11）は口径26cm、器高10cm、高台径11.8cmで、脚内側に墨書きをみとめる。以上出土しているものの内、底や内側に墨書きのあるものが9点出土している。土師器の杯に「益田」（2点）と「益」（1点）が、皿に「阿」（1点）が、須恵器の杯に「馬主」（1点）と「益田」（1点）が、蓋に「阿奴」（1点）と「阿奴兵」（1点）が、高杯に「阿奴」（1点）がそれぞれ墨書きされ、「阿」と「益田」は土師器・須恵器の両者にもあって、同一の所有者を示しているものであろうと思われる。Ⅲ B 区で出土した骨壺（図版第60-1,2）は完形品である。蓋は口径13.5cmを測り、扁平な擬宝珠がつき、短頸壺は口径10cm、器高16.1cm、胴径20.2cmを測り、最大腹径はやや上位にある。蓋と短頸壺の肩部にかけて自然釉がかかる良質なものである。

中世の遺物としては、瓦器・土師器・須恵器・中国製陶磁器などが出土しているが、一括資料として良好な井戸 103 出土のものを記す。

井戸 103 の遺物はほぼ同一層位から出土していく、瓦器（椀・羽釜）、土師器皿、須恵器鉢がある（図版第60-8～7）。瓦器の椀（3,4）は口径13.5～14cm、器高4.6～4.8cmで、外面に暗文がなく、内面の暗文も粗いもので、楕葉型Ⅲ-2期のものである。羽釜は足がつくものとつかないものとがある。三足のつくものは球形の胸に口縁が内傾する（図版62 a）。足のつかないものは口縁が直立ないし外反気味である（図版62 a - 1,2）。この内、完形のもの（5）は口径31cm、器高19.7cm、口縁外縁に浅い四線が入る。いずれも外面に縁が付く。土師器皿は大皿で口径13.4cm、器高2.4cmである。須恵器鉢は口径29.6cm、器高11.6cmを測り、口縁はわずかに丸味をもつ軟質で、東播系のものである。

その他、綠釉椀の底部・白磁碗（IV・禮類）、無文の青磁碗・砥石・延喜通宝（2点）などが柱穴から出土している。

3. IV区の調査

基本的な層序は、耕土（0.1～0.5）、床土（0.05m）、以下灰色砂礫土層、黃灰色土層、青灰色砂礫土層が数十cm単位で複雑に堆積している。全体的に檜尾川の旧流路と思われる。

(A) 遺構（図版第52 a・95）

調査区の東端でわずかに遺構をみとめる。検出した遺構は、溝・井戸・土壙墓、その他柱穴である。溝の東側には遺構はない。

溝1は幅0.5～0.1m、深さ約0.2mを測り、やや西に曲りながら南へ伸びる溝である。埋土は灰色砂礫で、瓦器、土師器、中国製陶器などが調査区のやや北寄りで出土している。

井戸1は溝1に重複して検出した。溝1より新しく、直径1.5m、深さ1.1mを測る円形の井戸である。埋土中から瓦器片が若干出土しただけである。

土壙墓は4基検出した。土壙墓2～4はほぼ等間隔に方向を一定にして並ぶ。いずれも瓦器、土師器が出土している。土壙墓1は南北方向で、長さ1.4m、幅0.8m、深さ0.1mを測る不定形なものである。土壙墓2は長さ1.3m、幅0.7m、深さ0.2mを測る方形を呈する。土壙墓3は長さ1.6m、幅0.6m、深さ0.4mを測り、小判形を呈する。土壙墓4は長さ1.3m、幅0.6m、深さ0.05mを測り、小判形を呈する。その他、土壙墓4の北側に直径0.6～0.7m、深さ0.3mの円形を呈したピットが数個あり、埋土から瓦器、土師器が出土している。

柱穴は建物としてのまとまりあるものがなかった。

(B) 遺 物 (図版第60～68)

溝1から瓦器(碗)・土師器(皿・羽釜・壺)・中国製陶器などが出土している。瓦器碗・土師皿(図版第60～8～10)は宮田遺跡神社南地区出土のものと同時期で、輪葉型I～2期に相当する。中国製陶器は白磁碗で、II・IV・V類があり、全体の1.1%を占める。土師器壺は、口縁がくの字形に外反し、外面に粗い刷毛目を施す。全面に焼がついている。羽釜は、口縁直下に下向きのツバがつくものと、やや下方に水平なツバがつくものがある。

4. V区の調査

(A) 遺 構 (図版第65～71・98)

基本的な層序は耕七、床土、黄褐色砂礫土層(0.3～0.4m)、黄褐色粘土層(0.1～0.2m)、灰色粘土層(0.3～0.5m)、暗灰色粘土層(0.2m)、黄灰色砂質粘土層あるいは青灰色砂礫層「地山」である。地山自体も旧横尾川の氾濫によって形成されたものである。地山面は北から南へ徐々に傾斜していく。

検出した遺構は、弥生時代中期の方形周溝墓83基と溝状遺構がある。作成した全体図は隣接する以前の調査区をも加えているが、番号は今回の調査で検出した順位に従う。

1号周溝墓 東西8.5m、溝幅1.0m、深さ0.3mを測る。南北長は不明である。周溝内西北隅に不整形の落ち込みを検出したが、主体部かどうかは明らかでない。

2号周溝墓 1号周溝墓の西周溝を共有する。溝幅2.0mを、深さ0.3mを測る。昭和51年度調査区の2号周溝墓の東と南に検出した周溝につながると考えられる。推定規模は東西6m、南北約6mである。

3号周溝墓 1・2号周溝墓の南に位置し、東北隅を検出した。旧横尾川にそって周溝内側が削平されているが、溝幅1.5～2.0m、深さ0.3mを測る。周溝の溝底に接して縦内第II～第III様式期の壺・水差・甕が、溝底上約0.2m逆差して第IV様式期の甕が出土した。

4号周溝墓 溝幅0.6～1.0m、深さ0.1～0.3mで3号周溝墓の東周溝を共有する。東北隅は

上層の砂礫層が地山を削っているため、明確でない。東西長7.5mを割り、西北隅に長さ1.5m、幅0.5m、深さ0.1mを測る土壌を検出した。主体部の一つであろう。

5号周溝墓 溝幅0.9m、深さ0.3mを測り、東南部のみ検出した。

6号周溝墓 5号周溝墓の東周溝を共有する。深さ0.1mの周溝は南周溝から東周溝へ続くが、全部は検出できなかった。北周溝は掘削されていない。

7号周溝墓 5号周溝墓の南にあって、溝幅0.5m、長さ2.0mの南北溝とそれに直交するよう位幅0.5mの溝がみとめられた。

8号周溝墓 深さ0.2~0.4mの周溝がめぐるが、西と南の隅部は陸橋部を形成する。規模は東西7.2m、南北6.5mで、南周溝の溝底から0.2m遊離して第Ⅱ様式期の壺が出土している。

9号周溝墓 北東隅以外は調査区域外にある。溝幅2.0m、深さ0.5mを測り、東周溝の底から第Ⅱ様式期の壺が出土している。

10号周溝墓 東西4.5m、南北3.5mで、8号周溝墓の南周溝溝から幅0.5~1.0m、深さ0.3mの周溝がめぐる。

11号周溝墓 10号周溝墓の西周溝と接し、北西と南周溝は掘削されていない。規模は東西3.7m、南北3.0mである。

12号周溝墓 東西7.5m、南北5.5mで幅1~1.5m、深さ0.4~0.5mの周溝がめぐる。西周溝は13号周溝墓と溝を共有し、東周溝は14号周溝墓と接する。

13号周溝墓 12号周溝墓と溝を共有する。規模は東西9.0m、南北7.0mである。西周溝は幅約3.0m、深さ0.2m、北周溝は幅1.5m、深さ0.5mを測る。北周溝の東北隅の外のりは12号周溝墓の北西隅の外側から掘削されており、13号周溝墓が新しいものと考えられる。東周溝と12号周溝墓との間は2.0mである。南周溝のやや東よりと南西隅の溝底に接して第Ⅱ様式期の壺が、西周溝の内のりを削って第Ⅱ様式期の甕が出土している。

14号周溝墓 12号周溝墓と接し、東西8.5m、南北7.5mの規模である。北周溝は幅1.4m、深さ0.4m、西周溝は12号周溝墓の東周溝（幅約2.8m、深さ0.5m）を共有するが、新旧は不明である。西周溝の南寄りの溝底で第Ⅱ様式期の壺が出土している。

15号周溝墓 12号周溝墓の北側で、幅1.5m、深さ0.4mを測るL字形の周溝がめぐる。溝底はわずかに高くなるため、2つの溝が接しているのかもしれない。この周溝の東に長さ2.0m、幅0.8m、深さ1.5mを測る長方形の土壙墓を検出した。周溝内側に位置するところから、主体部と考えられる。

16号周溝墓 東西7.5m、南北5.5mの規模で18号周溝墓の南に接する。東・西周溝は幅約1.0m、深さ0.15~0.25mを測る。南周溝は19号周溝墓の周溝に削られている。

17号周溝墓 12・14号周溝墓の南に位置し、南北6mを測る。北周溝は幅約2.0m、深さ0.7m、西・南周溝は0.6~1.0m、深さ0.1~0.15mを測る。

18号周溝墓 16号周溝墓の西に位置し、他に比べて方向を異にする。周溝は幅約2.0m、深さ0.2mを測り、東北部のみ検出した。

19号周溝墓 16・17号周溝墓を削って形成されている。規模は東西9.5m、南北7.0mで、東・北周溝の幅2.0m、西周溝の幅3.0mを測る。

20号周溝墓 19号周溝墓の南周溝に接している。周溝は幅約1.0m、深さ0.6mで、東北隅を検出した。19号周溝墓より新しい。

21号周溝墓 規模は東西9.5m、南北7~8mである。西・北周溝の深さ0.5m、東・南周溝の深さ0.2m、幅は共に2.0mを測る。

22号周溝墓 21号周溝墓の南西隅に接し、東北隅のみ検出した。北周溝は幅8.3m、深さ0.8m、東周溝は幅約1.0m、深さ0.3mを測る。

23号周溝墓 21・22・24号周溝墓の溝を共有する。規模は東西9.0m、南北6.5mで、東周溝は幅約2.5m、深さ0.8mを測る。

24号周溝墓 23・26号周溝墓の溝を共有する。規模は東西7.5m、南北8.0mで、北周溝は幅1.0m、深さ0.4mを測る。

25号周溝墓 24号周溝墓の東南隅と接し、西北隅のみ検出した。北周溝は幅約2.0m、深さ0.2mを測り、西北隅が開口し、32号周溝墓に続く。

25号周溝墓 24号周溝墓の東南隅と接し、西北隅のみ検出した。北周溝は幅約2m、深さ0.7mを測る。

26号周溝墓 21・24・27・28号周溝墓の溝を共有する。規模は東西9m、南北10mで、北周溝は幅2m、深さ0.4m~0.5mを測る。

27号周溝墓 26号周溝墓の溝を共有する。西周溝は幅2.5m、深さ0.1m~0.15mを測り、溝底から第Ⅱ様式期の壺と甕が出土している。

28号周溝墓 26・29号周溝墓の溝を共有する。規模は東西6m、南北5mで、東周溝は幅1.3m、深さ0.2m、西周溝は幅1.8m・0.4m、北周溝は幅1.5m、深さ0.2mを測り、西北隅が開口し、32号周溝墓に続く。

29号周溝墓 28号周溝墓の溝を共有し、南を古墳時代の溝101によって削られている。規模は東西5.0mを測り、東周溝は幅0.7~0.8m、深さ0.15mを測る。

30号周溝墓 29号周溝墓の溝を共有し、西南隅のみ検出した。南周溝は溝101によって削られている。

31号周溝墓 14号周溝墓と溝を共有する。南周溝は幅0.9m、深さ0.2mで東西7m以上を測る。

32号周溝墓 14号周溝墓の東南隅に接し、方向を異にする。規模は東西・南北とも約5.0mを測り、北周溝は幅約1.0m、深さ0.2mを測る。主体部は中央にあって、長さ2.0m、幅1.2m、深さ0.2mで、方形のしっかりした掘り方をもつ。内部に木棺を収めたものと考えられる。

33号周溝墓 17号周溝墓の溝を共有し、東西・南北とも5mを測る。東周溝は幅1.0m、深さ0.2mで21号周溝墓の西北隅に接しているようである。北西隅と南周溝の溝底に接し第Ⅱ様式期の甕が出土している。

溝101 26~30号周溝墓の間を北西から南西にかけて掘削している。溝は幅3.0m、深さ約0.8mを測る。埋土は青灰色砂礫(約0.3m)=上層、暗青灰色粘土=下層で、上層と下層の境で布留式土器とナスピ形木製品が出土している。

(c) 遺物 (図版第64b・72~82・98)

各周溝墓から出土した土器は第Ⅱ様式期から第Ⅲ様式期にかけてのものである。復元したもの

はいずれも周溝より出土したもので、現在整理途中であるため、全てを掲載することができなかつた。以下周溝墓毎に記述する。

2号周溝墓 第II様式の壺で、口径25cm、器高42cmを測り、外面は刷毛調整を施す。外面全体に縁がつく(図版第72-1)。

3号周溝墓 壺・壺・水差が出土している。壺は短頸のもの(図版第72-2)と長頸で口縁が開くもの(図版第72-3・4、図版第73-1・2・3)がある。短頸のものは口径9.5cm、器高18cmを測り、外面下位をヘラ削りの後、頸部から胸部にかけて直線文を4帯、波状文を1帯施す。口縁内側に3個の瘤状突起がある。長頸のものは器高60cm以上の大形のものから器高32cmの小形のものまであり、最も大きいもの(図版第72-3)は口径39cm、器高61cmを測り、頸部の付根に2条の貼り付け突帯をめぐらす。口縁内側に2個2対の瘤状突起があり、口縁端下を波状にする。頸部と胸部に波状文を施す。底部は木葉痕が残り、第II様式でも新しい段階に属する。また、2条の凸帯のあるもの(図版第72-4)は口径29.0cm、器高5.0cmで、頸部と胸部を刷毛で仕上げ、口縁内側と口縁端外面に細い波状文を施す。口径39.0cm、器高55.0cmで3条の凸帯のあるもの(図版第73-1)も外面を刷毛で仕上げ、口縁内側と口縁外面に弧状文を施す。凸帯のない口径24.0cm、器高36.0cmのもの(図版第73-2)も外面刷毛仕上げをする。口径19.0cm、器高32.0cmのもの(図版第73-3)は、凸帯がなく、外面を刷毛仕上げのあと、頸部下位に直線文を、胸部上位に波状文を施す。これらは底部に木葉痕がなく、第III様式である。水差は2点あって、復元可能なものでは口径10.0cm、器高28.7cm、頸部の付根に把手がつく(図版第73-4)。頸部から胸部にかけて波状文と直線文を交互に施す。第IV様式である。壺(図版第74-1)は口径14.8cm、器高22.5cmで、口縁が外反し、端部に波状文を施す。外面と口縁内側を刷毛で仕上げる。外面に縁がつく。第V様式である。なお、周溝の上層から出土した第VI様式の壺(図版第79-4)は口径15.0cm、器高25.0cmを測る。

8号周溝墓 壺・壺が出土している。壺は大形で口縁が開き、3号周溝墓出土のものと類似するものと短頸のもの(図版第80a-1)がある。壺は口径15.5cm、器高23.4cmで、外面を刷毛仕上げ、底部に木葉痕のこるもの(図版第74-2)がある。いずれも第II様式である。

9号周溝墓 小形の壺が出土している。口径4cm、器高14.5cmで頸部からまっすぐのびる口縁がつき、胸部上位に直線文を施すもの(図版第74-3)と口径10.8cm、器高20.7cmで口縁部がゆるく外反するもの(図版第74-4)がある。後者の底部は木葉痕のがこる。いずれも第II様式である。

10号周溝墓 瓢の破片が若干出土している。ゆるく外反する口縁を有するもので、第II様式に属する。(図版第80a-2)

13号周溝墓 壺・壺・高杯が出土している。壺(図版第80b-1)は口縁内側に瘤状突起があり、外面を粗い刷毛仕上げのち、直線文を施す。壺は口径14.5cm、器高23.3cmで外面を刷毛で仕上げ、口縁がゆるく外反するもの(図版第75-1)と口径17.2cm、器高26cmで口縁が屈折気味に外反し、口縁端外面に刻目を施すもの(図版第75-2)がある。後者は周溝墓形成後のものと思われ、第III様式に属し、他は第II様式である。高杯(図版第75-3)は碗状の杯部に棒状の脚がつき、脚の裾部は平坦である。口径13.5cm、器高10.5cmで第II様式である。

14号周溝墓 壺・高杯・鉢が出土している。壺は第II様式のもので、胸部に波状文と直線文を施

す。高杯（図版第75-5）は碗状の杯部に中実の脚がつき、器部は外反し、端部に刻目を施す。口縁端部にも刻目を施している。口径20.5cm、器高17.3cmを測る。また口縁が水平になるものも出土している。鉢（図版第75-4）は口径16.2cm、器高11.3cmで、口縁が外反し、底部に木葉痕がのこる。いずれも第Ⅱ様式である。

15号周溝墓 第Ⅱ様式の壺片が若土出土している（図版第80b-2）。

16号周溝墓 第Ⅱ様式の小形壺が出土している（図版第80b-3）。

17号周溝墓 瓢・高杯が出土している。瓢（図版第76-1）は口径25.5cm、器高44cmを測り、長頸で頸部と胴部に直線文を施す。胴部下位に穿孔している。第Ⅲ様式である。高杯（図版第75-6）は中空の脚部に口縁が水平に屈折する。外面はヘラミガキ、口縁端外面に刻目を施すもので、第Ⅱ様式である。

19号周溝墓 壺・壺・蓋が出土している。壺は長頸のものと短頸のものとがあり、長頸のものは第Ⅰ様式のものと第Ⅲ様式のものがある。第Ⅱ様式のもの（図版第76-2）は口径21.3cm、器高35.0cmで、頸部に直線文を、胴部上位に波状文を施すが、極めて稚拙な構造である。底部に木葉痕がのこる。第Ⅲ様式のもの（図版第77-1・2）は口径13.2cm、器高26.0cmで、最大径が下位にあり、頸部下位から胴部上位にかけて直線文を施す。第Ⅱ様式の短頸の壺（図版第76-4）は口縁がくの字に外反し、外面を刷毛で仕上げる。蓋は口径11.6cmで端部に刻目のあるもの（図版第77-3）と口縁が欠失するもの（図版第77-4）がある。前者は第Ⅲ様式、後者は第Ⅱ様式で縁がつく。壺はいずれも底部に木葉痕がのこり、縁がつく第Ⅱ様式のもので、口径18.3cm、器高19.0cmを測るものの（図版第77-5）と口径18.2cm、器高16.0cmを測るもの（図版第78-1）がある。

20号周溝墓 無頸の壺が出土している。口径12.0cm、器高10.0cmで、口縁に1対の穿孔がある。第Ⅱ様式である（図版第78-2）。

21号周溝墓 壺・壺・高杯が出土している。壺は口径25.0cm、器高42.5cmで、口縁内側に3個一対の瘤状突起がつくもの（図版第78-3）と2個2対の瘤状突起がつくもの（図版第81b）とがある。前者は頸部から胴部にかけて稚拙な波状文を施し、口縁内面は粗い刷毛で仕上げる。また壺片（図版第81b-1）には稚拙な巻状文や竹管文を施す。壺（図版第79-1）は口径18.8cm、器高18.2cmで、底部に木葉痕がのこる。高杯（図版第78-4）は中実の脚に斜め方向にのびる杯部がつき、口縁はほぼ水平に屈曲し、外面をヘラミガキを施し、底部に木葉痕がのこる。いずれも第Ⅱ様式である。

23号周溝墓 壺・鉢が出土している。壺（図版第82a-1）は口縁内側を粗い刷毛で仕上げ、底部に木葉痕がのこる。鉢（図版第78-5）は口径14.0cm、器高15.0cmで底部から内縁気味に口縁までつづく。外面は丁寧なヘラミガキを施し、底部に木葉痕がのこる。いずれも第Ⅱ様式である。

24号周溝墓 第Ⅱ様式の壺（図版第82a-2・3）と甕が出土している。壺はいずれも縁がつき、口縁が短く外反するもの（図版第79-2）と口縁が少し長めに外反するもの（図版第79-3）がある。前者は口径15.5cm、器高21.0cm、後者は口径15.5cm、器高17.0cmを測る。

溝101 布留式期の壺片（図版第82b-1）とナスピ形木製品（図版第64b-3）が出土した。

その他、溝101上層から第V様式の土器や須恵器が出土している（図版第82b）。（稿本）

X. まとめ

まとめ

今年度は郡衙周辺遺跡の調査と併行して、郡衙関連遺跡についても、積極的に発掘調査をおこなった。これまで郡衙周辺遺跡の調査を通して、弥生・古墳時代から郡衙成立に至る郡家集落の発展過程を解明しようとしてきたわけであるが、今回からは、視点を拡大し、嶋上郡内に所在するすべての遺跡を調査対象とした。すなわち、一定地域内にある各遺跡の変遷を相対的に評価することによって、なぜ嶋上郡衙が郡家の地に成立するのかを明らかにしようとしたからである。以下、今年度の調査で得られた成果をもとに、少しまとめてみることにする。

郡家川西遺跡14-J・N地区の調査では、弥生時代から歴史時代にいたる遺構を検出した。当該調査区は、郡家川西遺跡のなかでも西端部にあたると考えられ、発掘当初からその成果が期待されていた。弥生時代では後期の井戸と溝が検出され、従来考えられていた後期の遺跡の範囲を大きく西へ拡大する結果となった。そして、井戸と溝は、いずれも集落と直接結びつく遺構であり、良好な包含層の遺存と相俟って、今後の周辺地区的調査が期待される。古墳時代の遺構としては、20基の土壙があり、なかでも土壙2・3から検出された須恵器は、6世紀後半の時期細分にとって好資料である。そのほか、伴出した多くの土器についても、多様な生活状況がうかがえ興味をひく。各土壙は埋土の状態から、すべてを墓として速断すべきではなく、その性格については、今後に残された課題である。当調査区で特筆すべきは、7世紀中頃の掘立柱建物跡と倉庫跡を検出したことであろう。この時期の明確な遺構は、郡衙周辺地域では初見である。当調査区の南70mに白鳳時代の芥川廃寺との関連が充分考えられる。つぎに6-L地区の調査成果についてみると、調査区が狭小にもかかわらず、床面積56m²を有する竪穴住居址を検出したのは幸運であった。当該地は、弥生時代後期から古墳時代前期にかけて住居址が群在する地域の一画であるが、これほどの規模をもつものは極めて少ない。また、本文でも触れたように、住居址の外壁に接して検出された多くのビットは、竪穴住居の壁構造を考えると、一つの資料となるであろう。昭和54年の7-C・G地区の調査でも同様の遺構を検出している。

以上、郡衙周辺遺跡の調査の主なものについて述べたが、いま一つ注意を喚起しておくものがある。それは、嶋上郡衙跡北側一帯の調査において、奈良時代～平安時代の包含層から、しばしば埴輪片が検出されることである。今年度も14-J・N地区から埴輪が、また6-L地区から金環が出土している。かって、山陽道以南の地域で川西古墳群（今年度も75-O地区で方墳を検出している）を設定したが、北側の地域でも、奈良時代以降、幾つかの古墳が削平されている可能性がある。今後、周辺地域の調査に際して、留意すべき点である。

なお、7-C・G地区、6-J・K・N・O地区などの阿久刀神社周辺地域で、高槻市教育委員会が過去におこなった調査についてその概要を本書に併せ報告した。なかでも、7-C・G地区の弥生時代中期・後期、古墳時代前期の土器の一括資料、6-J・K・N・O地区の井戸から検出した墨書き器とその一括資料、6-M・N地区の奈良時代掘立柱建物群など見るべきものが多い。内容については本文に詳しい。

つぎに大歳司遺跡についてみてみる。大歳司遺跡は芥川を介して、鳴上郡衙跡と対峙しており、また遺跡地の北辺に式内社神服神社を擁するなど、鳴上郡衙跡との共通要素も多い。今回はトレンド調査が主であり、特筆すべき事柄はあまりないが、昭和58年4月におこなった緊急調査や昭和55年6月～9月に実施した府立芥川高校の事前調査で、弥生～中世にいたる数々の資料が累積されており、将来に期すべき重要な遺跡である。とくに府立芥川高校の調査で検出している多数の律令祭祀具は、その証左であろう。

古曾部南遺跡では、調査の結果、これまでおぼろげに考えられていた遺跡の範囲が明確になった。調査地点での遺構は、4世紀～5世紀にかけてのものが中心であるが、二次堆積土からは弥生時代～奈良時代の土器が検出されており、遺跡の本体はもう少し北側にあると考えられる。すなわち天神山丘陵と古曾部丘陵との谷間の微高地に立地するものと考えられる。とくに天神山丘陵上には、中将塚から星神車塚まで一つの系譜でたどれる天神山古墳群が所在している。この古墳群は古曾部南遺跡の集落の首長墓群と考えることもでき、今後の調査如何によって、両遺跡の結びつきはより鮮明なものになるであろう。

安満遺跡については、これまで幾多の調査がおこなわれており、興味ある事実が明らかにされている。とくに今年度は、京大農場東側の地域において数多くの周溝墓を検出したので、とりえずその概要を報告することにした。本市教育委員会では、安満遺跡の重要性に鑑み、継続的に発掘調査を実施してきたが、遺跡の東部にあたる高塙町を中心とした地域での調査がとりわけ多かった。そこで、昭和51年度以降の当該地域での調査の概要を報告しておく。今後の調査・研究に資するところがあれば幸甚である。

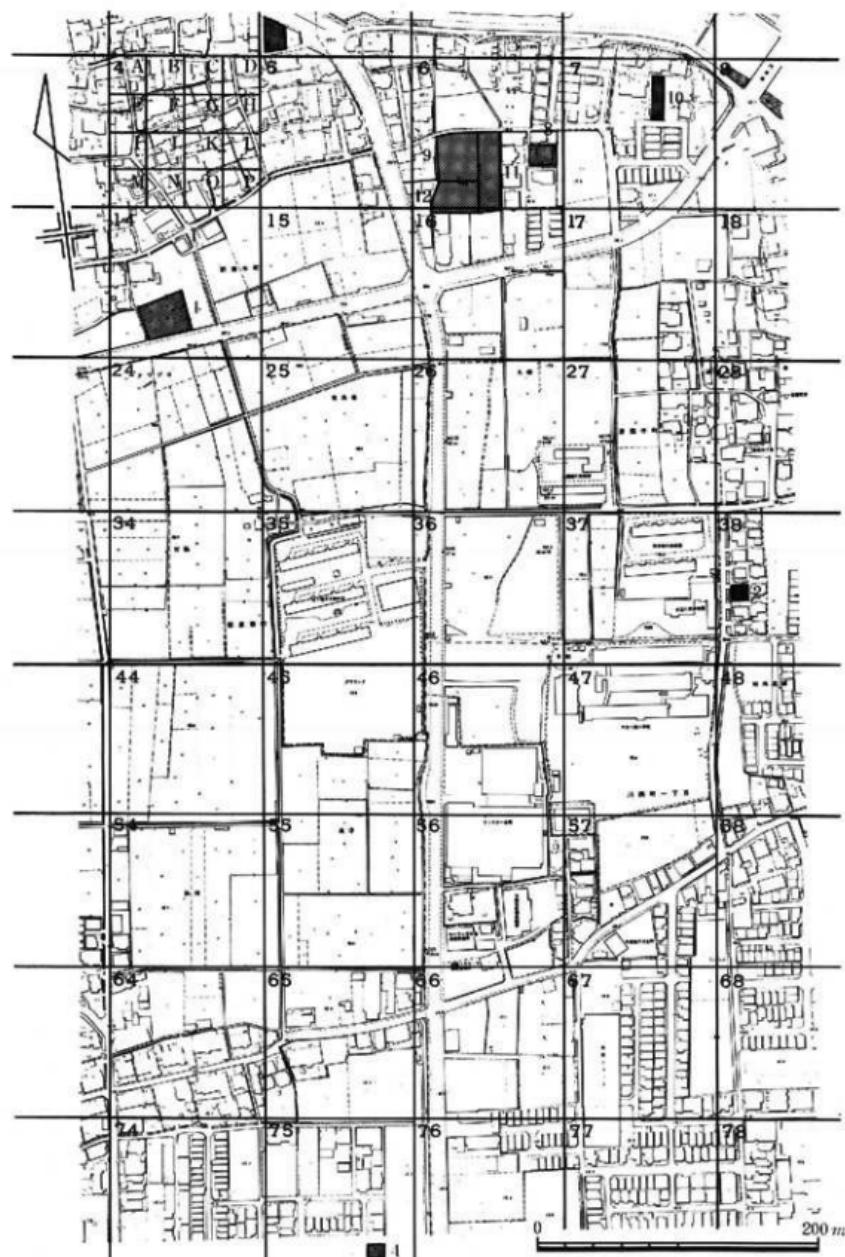
さて、今回検出した周溝墓群は33基を数え、この地区でのこれまでの調査例を加えると50基をとることになる。時期的には畿内第Ⅱ様式期から、第Ⅲ様式期にかけてのものである。Ⅶ区の南北150mの京大農場南東隅では、昭和55年に第Ⅱ様式期から第Ⅲ様式期にかけての周溝墓を検出しており、その間の未調査区域に周溝墓群の存在を想定するならば、優に100基をとることになる。しかも時期は第Ⅱ様式期と第Ⅲ様式期に限定されており、この短期間にこれだけの周溝墓群を造営するには、相当規模の集落が考えられなければならない。周溝墓のあり方は、溝を共有しないし接続しながら、一定の方向性をもって順次築かれた様子がうかがわれ、この時期の周溝墓群の形態としては普遍的なものと考えている。安満遺跡東部のこれまでの所見では、中期後半になるとこの地区では周溝墓はつくられなくなり、墓域は遺跡西部へ移ると考えられる。昭和42年に遺跡西部で検出した周溝墓（墓域）と東部の周溝墓群（墓域）とは約600m隔っており、その間は第Ⅰ様式期の環濠集落を含む弥生時代の居住地域が拡がっていると考えられる。半にも、この遺跡の本体については開発が進んでおらず、現在もなお遺構が良好な状態で保存されている。なお、昭和55年3月、遺跡地の南辺部から、弥生時代前期の用水路と井堰が検出され、水田の位置を確認している。このように、弥生時代の安満遺跡は、居住地域・墓域・水田の3つの要素が判然としており、なおかつその位置関係が判明している数少ない集落遺跡である。まして居住地域が完全に保存されていることは、衛星都市高槻の今日の情況からみて、希有のことといわねばならない。安満遺跡を保存することは、その学術的価値はもとより、貴重な文化遺産を後世に伝え残すことにしてならない。

高麗の古代遺跡の動向についてみると、芥川の西にある郡家川西遺跡と東にある安満遺跡は、拠点集落として、つねに車の双輪の如き役割を果していることが、容易に理解されるであろう。郡家川西遺跡については、その中心部が史跡・鶴上郡衙跡・附寺跡として保存されており、郡衙周辺遺跡については継続的に調査を実施してきた。しかし郡衙の成立・発展について考える場合、関連遺跡の調査がいかに重要であるかが認識されてきたように思う。今後の調査に期するところ大なるものがある。（森田）

図 版



鳴上郡衙跡とその周辺



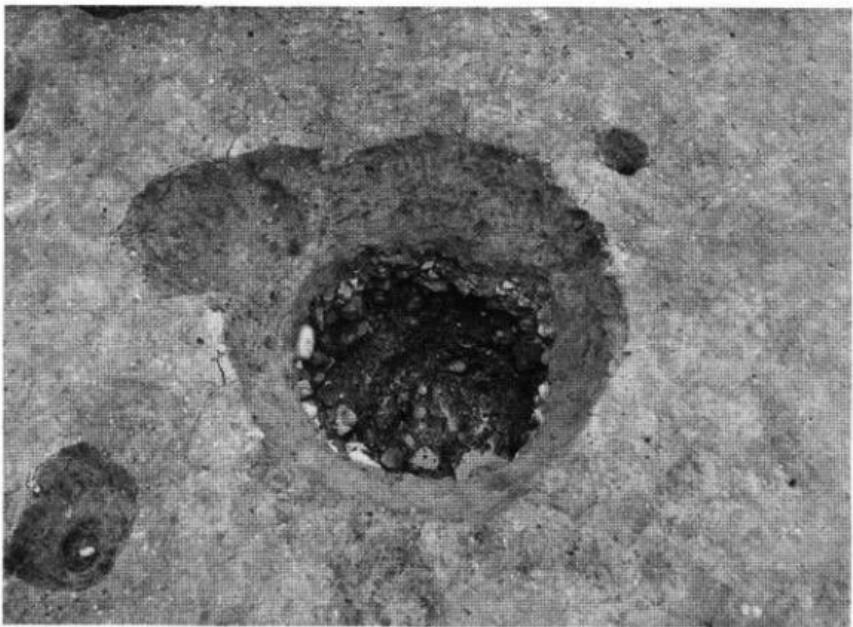
鶴上郡衙跡 調査位置図



鶴上郡街跡 空中写真



a. 14-J・N地区 東区(南側から)



b. 14-J・N地区 井戸1(東側から)



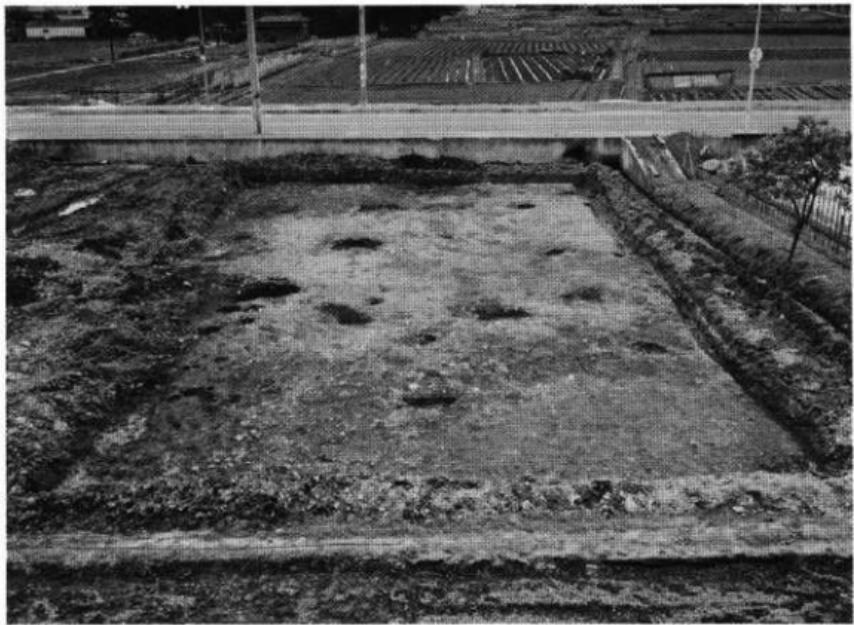
14—J・N地区 上・土壌1・2・3・4・5(西側から), 中・土壌17, 下・土壌19



a. 14-J・N地区 建物1(東側から)



b. 14-J・N地区 倉(西側から)



a. 14-J・N地区 西区（北側から）



b. 38-I地区（西側から）



a. 6-L地区 北部(東側から)



b. 6-L地区 南部(東側から)



a. 6-I・J・M・N地区 全景(南側から)



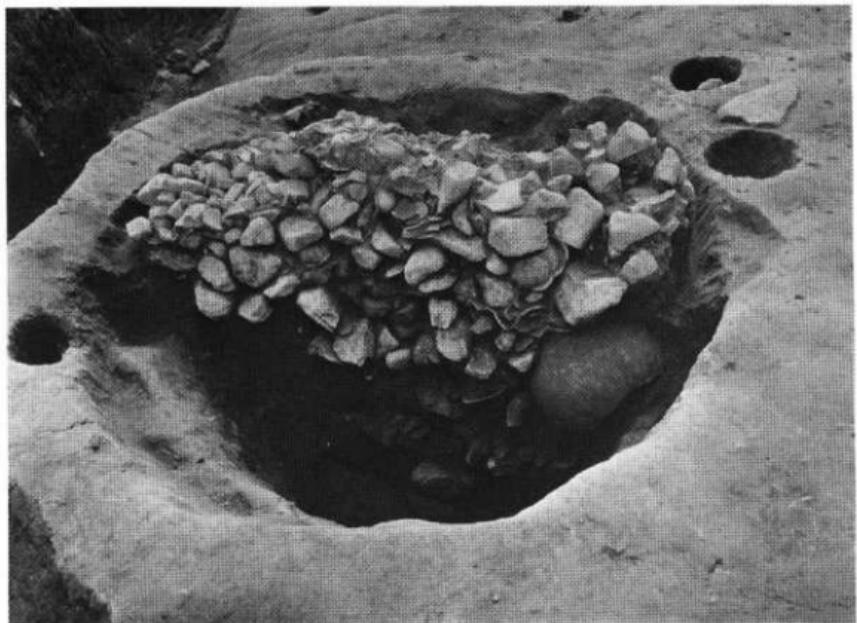
b. 6-I・J・M・N地区



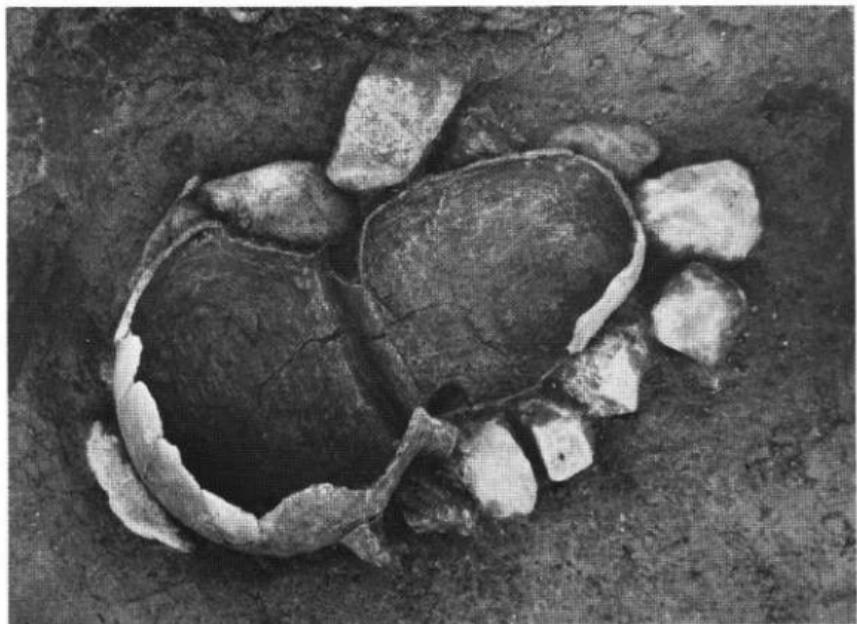
a. 7-C·G 地区（南側から）



b. 7-C·G 地区 住居址（西側から）



a. 7-C・G地区 井戸(北側から)



b. 7-C・G地区 土器棺墓出土状態(東側から)



a. 6-M・N地区 全景(東側から)



b. 6-M・N地区 東区(西側から)



a. 6—M・N地区 東区(北側から)



b. 6—M・M地区 N H₅ 建物(南側から)



a. 6—J・K・N・O地区 全景(南側から)



b. 6—J・K・N・O地区 全景(北側から)